

1974

大正十三年二月二十九日第三種郵便物認可  
大正十四年一月一日發行(每月一回十日發行)

永樂町人編輯



正月號

【第十七號】

謹 賀 新 年

金 剛 餅 頭 山 飴  
 金 剛 煎 餅 頭 山 飴  
 金 剛 羊 羹 餅 頭 山 飴  
 金 剛 お こ し 羹 餅 頭 山 飴  
 金 剛 し る こ し 羹 餅 頭 山 飴  
 金 剛 柏 子 菓 朝の鮮菓子 松の實菓子 羹 餅 頭 山 飴  
 金 剛 ぼ ん ぼ ん 羹 餅 頭 山 飴  
 金 剛 う に 羹 餅 頭 山 飴  
 金 剛 この わ た 羹 餅 頭 山 飴  
 金 剛 で ん ぶ 羹 餅 頭 山 飴  
 金 剛 ほ し 羹 餅 頭 山 飴

電話局本  
番七二(七四)  
番五七(七四)

龜 屋 商 店

町本城京  
目丁二

京城雜筆正月號執筆者



# 京城雜筆正月號執筆者

(大體原稿到着順)

篠田 治策	(李王職次官)	熊本城	(二)
久松 前平	(朝新政治部長)	私の家庭圓滿主義	(三)
大澤 勝	(總督府醫院研究室)	扶餘と奈良	(四)
中村 健太郎	(朝鮮佛教主幹)	伊勢徴古館を觀て	(六)
丸山 鶴吉	(大日本青年會理事)	お題目『修養研讀』	(七)
川添 種一郎	(鎮南浦商議會頭)	運動趣味	(八)
市村 毅	(總督府技師)	南京虫の記	(九)
安藤 又三郎	(滿鐵理事)	百鍊翁	(一〇)
高木 背水	(西洋畫家)	旅の恥	(一一)
深尾 道恕	(殖銀理事)	繪の話	(一二)
西村 保吉	(前殖産局長)	あまつ旅	(一三)
今村 鞆	(李王職庶務課長)	牛の花嫁	(一四)
小水 眞二	(京城佛教慈濟會)	大黒天	(一六)
藤井 寛太郎	(不二興業社長)	世界語	(一八)
吉村 貫之	(木浦公立小學校長)	雜筆推讀	(二〇)
廣江 澤次郎	(在奉天實業家)	支那縱横記	(二一)
河谷 靜夫	(京城日報社理事)	亦樂	(二二)
古城 梅溪	(實業家)	詩學古事抄錄	(二三)
平井 熊三郎	(勸業信託事務)	支拂日統一問題	(二四)
木戸 虎藏	(齒科醫院長)	我田引水	(二五)
守屋 徳夫	(殖銀秘書役)	京城つれく草	(二六)
小籠 元司	(久原鑛業出張所長)	賀筵の歌	(二八)
瀨戸 深	(瀨戸病院長)	性研究を讀む	(二九)
森 悟一	(殖銀理事)	銀豪候逸事	(三〇)
藤尾 直勝	(勸業信託常務)	趣味の飼鳥	(三一)
川端 三次郎	(角田洋服店支配人)	父と新聞	(三二)
時實 秋穂	(京畿道知事)	牛兒	(三四)
谷 多喜磨	(京城府尹)	天風先生	(三六)
河西 喜雄	(京城日報社)	狹暮の話	(三七)
岸 巖	(鮮銀整理係主任)	お正月	(三八)
寺尾 猛三郎	(實業家)	中村天風師	(三九)
飯泉 幹太	(鮮銀庶務局長)	ゴルフ恥さらしの記	(四〇)
蒲原 久四郎	(遞信局長)	年賀狀	(四二)
尾崎 敬義	(東拓理事)	有漏雜染	(四三)
堀内 滿輔	(ちよぶや主人)	年頭閑話	(四四)
永樂 町人	.....	正月漫筆	(四五)

(其他社友數氏執筆)

京  
城  
雜  
筆

京  
城  
雜  
筆  
正  
月  
號  
執  
筆  
者

# 謹 賀 新 年

金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛
ほ	で	この	う	ぼ	柏	お	羊	煎	饅	山
し	ん	の	に	ん	子	こ	羹	餅	頭	飴
	ぶ	あ			菓	し				

朝の  
鮮菓子  
松の  
實菓子

電話局本  
番七二  
番五七四

## 龜 屋 商 店

京 城 本 町  
二 丁 目



# 京城雜筆正月號執筆者

(大體原稿到着順)

篠田 治策	(李王職次官)	熊本城	(二)
久松 前平	(朝新政治部長)	私の家庭圓滿主義	(三)
大澤 勝	(總督府醫院研究室)	扶餘と奈良	(四)
中村 健太郎	(朝鮮佛教主幹)	伊勢徵古館を觀て	(六)
丸山 鷓吉	(大日本青年會理事)	お題目『修養研讀』	(七)
川添 種一郎	(鎮南浦商議會頭)	運動趣味	(八)
市村 毅	(總督府技師)	南京虫の記	(九)
安藤 又三郎	(滿鐵理事)	百鍊翁	(一〇)
高木 背水	(西洋畫家)	旅の恥	(一一)
深尾 道恕	(殖銀理事)	繪の話	(一二)
西村 保吉	(前殖産局長)	あまつ旅	(一三)
今村 輛	(李王職庶務課長)	牛の花嫁	(一四)
小水 眞二	(京城佛教慈濟會)	大黒天	(一六)
藤井 寛太郎	(不二興業社長)	世界語	(一八)
吉村 實之	(木浦公立小學校長)	雜筆推讀	(二〇)
廣江 澤次郎	(在奉天實業家)	支那縱橫記	(二一)
河谷 靜夫	(京城日報社理事)	亦樂	(二二)
古城 梅溪	(實業家)	詩學古事抄錄	(二三)
平井 熊三郎	(勸業信託事務)	支拂日統一問題	(二四)
木戸 虎藏	(齒科醫院長)	我田引水	(二五)
守屋 徳夫	(殖銀秘書役)	京城つれく草	(二六)
小瀧 元司	(久原鑛業出張所長)	賀筵の歌	(二八)
瀨戸 潔	(瀨戸病院院長)	性研究を讀む	(二九)
森 悟一	(殖銀理事)	銀臺候逸事	(三〇)
藤尾 直勝	(勸業信託常務)	趣味の飼鳥	(三一)
川端 三次郎	(角田洋服店支配人)	父と新聞	(三二)
時實 秋穂	(京畿道知事)	牛兒	(三四)
谷 多喜磨	(京城府尹)	天風先生	(三六)
河西 喜雄	(京城日報社)	筑碁の話	(三七)
岸 巖	(鮮銀整理係主任)	お正月	(三八)
寺尾 猛三郎	(實業家)	中村天風師	(三九)
飯泉 幹太	(鮮銀庶務局長)	ゴルフ恥さらしの記	(四〇)
蒲原 久四郎	(遞信局長)	年賀狀	(四二)
尾崎 敬義	(東拓理事)	有漏雜染	(四三)
堀内 滿輔	(ちよぶや主人)	年頭閑話	(四四)
永樂 町人	.....	正月漫筆	(四五)

(其他社友數氏執筆)

# 熊本城

法學博士 篠田治策

私は昨秋熊本に遊んで、熊本城の築造に二つの特徴ある事を知つた。石垣の構造と、堀井の多いことが即ち夫れである。

此等の特徴は、清正が朝鮮役に於て得たる、苦き経験より突出したるものなるを私は直覺しました。縦横に設けられたる空堀の配置や、抜け途の構造其他に於て、他に幾多の特徴あるかも知らぬが、我國の築城法に何等の智識を有たぬ私には、夫れは判らぬ。

熊本城の石垣を見るに低きものは別に特徴無きも、本丸其他高き石垣の構造は、下部が著しく緩傾斜にして、殆んど鑿登し得るが如きも上部に至つて急勾配となり、最も上部は殆んど反り返へるが如き觀を早して居るが、下部の緩傾斜が即ち最も特徴のある部分である。堀井は舊來城中に於て、百二十個所を數へたそふであるが、現在するもの尙ほ十數個所ある。現に本丸内第六師團司令部の庭前に在る井の如きは、深さ百數十尺に達し水量の豊富なること驚くべき程にて、近年師團にて其浚渫を企てた際、人夫三十名が二斗樽二個を使用し、一分間一回の速度を以て、終日汲水せし少しも減水せず。翌日更に人夫三十名を増加し四斗樽二個を以て一分間に一石二斗の

汲水を試みたるも、終日して水深僅かに九尺を減したるのみだといふことである。本丸の最高地に斯る大規模の深井を穿ち、籠城の際の汲水を如何に考慮したかが窺はれる。

朝鮮役に於て日本軍は第一回の晉州城攻撃に失敗した。一方に於て講和問題が進捗しつゝあるに拘らず、大閣は大に怒つて、兎に角晉州城の總攻撃を命じ、日本軍の名譽を回復せしめんとしたのである。外征の猛將勇みに勇さんで、此の孤城に押し寄せたるも、金城鐵壁は容易に抜けぬ。清正は一計を案して、先つ材木、粟、竹、土俵等を以て城壕を埋め、幾多の牛を殺し其生皮を以て覆ひたる龜甲を作り、二三十人其内に潜みて石垣に近づかす。石垣の角石を抜き取り、支柱を以て一旦上部の重量を支へ、更に數十間後方に退き、綱を以て其支柱を曳き倒し、味方に損傷を蒙ることなくして、石垣を崩壊せしめ、其崩れ目より突入して遂に晉州城を陥落せしめたのであつた。即ち垂直に近き石垣は少しく下部の支へを外せば、忽ち崩壊することを此時實驗したるが故に、此缺點を顧慮して、熊本城は其石垣の下部を、著しく緩傾斜にしたるものと思はる。

清正が蔚山の籠城に、水無きに苦められしは有名なる史實である。

昨年春、私は蔚山の古城を視たが、城中に井戸は無い、例令城中に井戸を掘つても、斯る孤立せる小山に水の出る筈は無い。只城の東北角城壁の外側に井戸があり、之れが現に附近民家の飲用水となつて居るが、當時も之れが唯一の飲用水であつたことは明かである。本丸の中央に自然石があつて、其上面を掘り回めて雨水も貯へる設備もあつたが、之れは至つて僅かの分量を貯へ得るに過ぎぬ。包圍を受けて既に三日目に外構へを敵に奪はれ、右の井戸は敵の戦線に歸した。徴志録によれば、

城内飢へ、水に乏しきを聞き、持久して之を困めんとした。晦日夜金應瑞をして、降倭を率ひて兵を城外の井泉の傍に伏せしめ、水を汲む倭兵十餘人を捉へた楊鎬大に喜び城中の様子を訊問し、糧絶へ水無く勢甚た窮縮したるを知つた。

とある。其他日本の古記録にも、饑渴に苦んだことは幾多の記載がある。

築城に給水を顧慮すべきは、言ふまでも無きことなれども、熊本城

### ◆紅

江頭 松子

紅の子の衣をめて池の邊にほせばうつらふ影もうつくし

が特に大規模に其設備をなしたるは、蔚山籠城の賜であるに相違ない。

名將清正が、朝鮮にて得たる成功と失敗の経験を、直ちに熊本築城に應用し、其効果朝鮮問題より起つた西南戦争に表はれたるは、朝鮮に居る私には興味津津たるものがあつた。

料理を本體として皆が載くと云ふ

# 私の家庭圓滿主義

朝鮮新聞政治部長 久松前平

◇私の家庭は五十八才の父と五十九才の母に二十八才の妻と八才の二女と五才の三女と一才の長男と都合七人の家族なのです。従つて舊思想の両親と何も分からぬ子供との間を縫つて生活を維持して行かねばならぬのですから私共夫婦の家庭生活と云ふものは餘程慎重を要する境遇にあるのであります

◇私共が結婚しましてから丁度滿十ヶ年を閲した新春を迎へるのであります。今日迄夫婦喧嘩一つしたことが無く両親と私共の間に意志の疏通を欲いだともありませんので、親戚の者からも又は友人の間にも『圓滿な家庭』として認められて居る様です。

◇事實、私共は今日迄立派に『家庭圓滿主義』を實行して來ました。今後永久に實行して行けることと思ひます。若し出來得るならば成る可く多くの家庭に此『圓滿主義』を普及し度いものと希望して居ります。

◇私の親戚許りの範圍でも夫婦の仲が氷の様に冷たく、或は嫁と姑の仲が悪かつたりして、資産があり地位もありしても一家不圓滿の爲めに一日として愉快な生活を續けることの出來ぬ家庭が多い様です。廣い世間でも割合に圓滿な家庭と云ふものは尠い様であります

らねばならぬ機會が多いのですが私共は何時でも『自分の家庭は世界中で唯一つしかない樂園だと心得て居りさへすれば間違ひは無いものだ』と云ふことを高調して居ります。

◇實際私共は『自分の家庭は世界唯一の樂園たり』との信念に依つて家庭を形成することに努めて居るので、何も六ヶしいことはありません『疑ひ』と云ふものを各人の心から取り去りさへすれば宜いのです、そして夫婦の和合が夫婦二人丈の和合で無くて親に孝養を盡し子供を慈くしむ爲めの夫婦和合で無くてはならぬものと信じて居ります。

◇ですから私の家庭には秘密と云ふものはありません、強いて求むるならば老人の心配する様な世帯上の遣り繰りを夫婦だけで責任を負つて居る位なのです。

◇花見にせよ芝居見物にせよ散歩にせよ或は衣類とか道具とかの買物にせよ全家族總動員をやるのです、七人が動くのですから用意をするにも電車の乗り降りにせよ非常な不便と心配を要すること勿論であります。笑ひさゝめきの裡に完全に樂園の移動が容易に行はれます。

◇家庭内の行事にしても色々自然に生れて來ますが一例丈を申上ぐれば各人の誕生日を祝ふことです、其時は其人の一番好きなお

料理を本體として皆が戴くと云ふことにして居りますが子供の方では非常に樂みにして居る行事の一つです。

◇兎に角家庭の不圓滿な爲めに不幸な生活を續けて居る人々が多い様に見えますし、亦圓滿主義も云ふ可くして行はれ難いものとされて居りますが、貧乏世帯の私の家庭でさへ、また七人と云ふ餘り少人数でも無い家庭でさへ、立派に何等の面倒も無く實行し得るのでありますから如何な複雑な家庭でも實現し得ることは容易の業であると思ひます。

◇只に家庭許りに限りませんが、親戚間にせよ友人間にせよ或は資本家と労働者關係にせよ、世の中のこと總てが互に誠心誠意の披露と善意の解釋とさへが續き得るならば即ち圓滿主義の實現だと信じます、私が丑年生れの一人である爲めに三十回目の丑年の新春を迎へるに當つて内輪話も亦一興かと存じ申上ぐる次第であります。(十二月三日稿)

## ◆松原氏の事

吉田 莊 一

鮮銀の松原營業部支配人は、俳人として俳文家として全國的に知られて居る人である▲そこで我社が氏に稿を依頼すること無慮數百回いつも『どうも出をほくれて今更ら氣まりが悪い……』などと遁げを張つて居たが、この暮には記者の顔を見るなり、洒然として『さうだ、年末勘定期だ、イヤ今度は四の五の申しません』キツパリと承知してくれた、得意の名文の來るのを待つて居る。

# 扶餘と奈良

總醫院醫院研究室

大 澤 勝

〔 四 〕

此間扶餘に行つた、それで私は簡單な奈良の佛と百濟佛との比較をやつて見度くなつた、元より藝術史的の眼もなし考古的の素養もない一門外漢の趣味の佛像研究である、變な所や間違つた所は讀者諸氏の御示教を淨め願つて置く。

元來扶餘の地は私が今更らしく申す迄もなく百濟の舊都である、近頃世間の注意が慶州に向つて注される割には此地は閑却せられて居る傾向がないでもない、なる程元來文化史上、藝術史上、新羅に比べて百濟の方が少々損な立場にあるし日慶州に金冠塚の發掘や何かで可なり世の中の耳目を聳動して居るのに反し、扶餘は物さびた慶都の情調をたゞよはせて居るばかり世間的には餘りバツトしない、だから餘り知られては居ない。然しそれだけに町其物が閑寂それ自身の様な氣がする、忠清南道を流れる白馬江の流れに従つて山を負つた繪の様な町である、私の今述べようとするのは之より始めに斷つた通り町のことぢやなくつて千三百年の星霜を靜に此地にあつて今も尙う寸暗い朝鮮家屋の中にあつてさうやかな光を放つて居る一體の百濟佛と浮世の變遷を他所に朝鮮の片田舎に立ちつくして居る一基の平濟塔のことである。

私は長らく一の疑問に逢着して解らずに居た、昌慶苑の中の博物館を御覽になつた方は入口の正面にある一の鐵佛に氣付かれること、思ふ、一體鐵佛と云ふものは日本内地では中々見られないものではあるが然しそれだけでは格別珍とするにも當らないが、此面相様式が我天平のものによく似て居る、

處が博物館の記録によると新羅佛で千三百年位のものとなつて居るそこでさうなると困つた事になる何故かと云ふと推古朝の諸佛殊に法隆寺の物等との比較の上で一才困つたことになる、日本の佛教が朝鮮を通じて來たことは今更らしく申す迄もないことであるが、其のものである朝鮮と奈良との佛像彫刻との間に一種ブラドックスとも見れば見られる現象があるのは頗る妙である、其後始終此疑ひは晴れずに居るが、何分アマチュアの研究者にはそれを釋くべき材料も時間もないので、つい其まゝになつて居た、しかし此場合考ふべきことは奈良朝殊に飛鳥藝術の根元は主として百濟にあることである時代の比較をやるのならば同時代の百濟佛について行はなければならぬと云ふことであるが、此方は尙むづかしい、何故かと云ふと眞の遺物と目するべき物が無い事である。而して終に私は年來の疑を解き得

べき機會を扶餘に於て得た——二の貴重な材料を見る事が出來たことが即ちそれで、其一は百濟佛であり二は平濟塔である、殊に百濟佛は現在に於て世界に存する唯一の物ださうで其藝術的價値を除外しても尙至寶とすべき價値は充分であると思ふ、光背をあはせても尺にみだない小さな釋迦の像であるが、面相を見た刹那に於て殆ど直覺的に法隆寺金堂の釋迦を思ひしめる位に止利風の匂ひの高いものである、しかし私は最も著しい相似を此一體の佛に對して示して居る物は法隆寺金堂の壁畫の中の西の側にある彌陀淨土に描かれたる諸佛の間であると思ふ。

一體飛鳥時代の藝術は吾美術史の第一頁であり、次に來るべき白鳳天平の天衣無縫とでも云ふべき眞盛りの時期の準備時代と目されるべきことは今改めて申す迄もないことである。

此時代の物は一體に天平盛期の物に比べると、稚拙であると云ふ事は否まれないが、しかし強い寫生

### ◆ 紅

工 藤 武 城

あえかなる舞の扇の紅にゆらぐ  
ともしの映えてまぶしき

風が面相に残つて居て生氣横溢して居る、そうして一口に云ふと此時代は尙朝鮮模倣の時代であると云ひ得る、處が其朝鮮の此時代が支那南北朝の模倣の時代である、従つて吾飛鳥朝の藝術は必然の結果として支那南北朝の模倣と云ふことになる。

處で更に溯つて印度、ギリシアの關係となると益々面白くなるが、

して居るが近頃又其破片が出たので完全な一體の佛をなすのである

ある、然し豫備智識を持たないで見たと寫眞がとれなかつたために



に朝鮮の片田舎に立ちつくして居る一基の平濟塔のことである。

而して終に私は年來の疑を解き得

ることになる。

處で更に溯つて印度、ギリシアの關係となると益々面白くなるが、之は更に機會を見て書いて見度いと思ふ。

此時代の特徴は一體に上下身の鈎合を無視したこと、それから面相について見ると目尻と鼻筋の線に存する一種の鋭さである、衣紋の線には硬さがあつて白鳳天平のそれに見る様な流麗さを缺いて居る、要するに全體として角がとれないと云ふ様な感じがする、就中私は面相に特に明かな時代の特色が出て居ると思ふ。

しかし此推古朝藝術を吾國に傳へた百濟の佛像彫刻は如何であるかと云ふと、現在奈良の佛の中百濟將來と稱せられて居る二三の物がある、藥師寺東院堂の聖觀音の如き其一であるが之れには異説がある、現在では明に白鳳期作物の代表的の物と見做されて居る、即ち實際百濟に源を發して居ると云つて推古藝術を代表すべき諸作と之れが根元をなすべき百濟との間に如何なる程度の相似があり相違があるかと云ふと、實際それと定むべき材料を吾々は今日迄得ることが出来なかつたのである、しかしそう云へば、慶州の遺物があるぢやないかと云ふ議論も出るだらう、これも至極一應御尤な考であるが、當時日本と直接の交渉のあつたのは百濟であつて新羅ぢやない、だから矢張吾人の切に知らんと欲するものは百濟本來の藝術である、此意味に於て扶餘の百濟佛は吾等に唯一無二の考古資料を提供すると共に世界の寶と云ひ得べきである、像は丈八寸を出でない立像で光背の上三分の一が程切損

して居るが近頃又其破片が出たので完全な一體の佛をなすのである左右の鈎合は相當によく取れて居て衣は勿論當時の物として僅に右肩にかゝり左の肩から右に流れて居る、一體佛像の説明をするのに寫眞ぬきは頗る亂暴な話で如何にアマチユアでも少々亂暴すぎる、實はカメラが旅行用のコカレットであつたためにやつて見たがともも細部は分らない、此點では是非此次行つた時にはいゝ奴をとり度いと思つて期して居る次第で現在の處殘念ながら私の知つて居る範圍内では寫眞に取られて世の中に出て居るものはない様に思ふ、それは兎に角として上半身と下半身と比べると稍上半身が長くはないかと思はれる。

面相は前にかいた様に目尻の切れが長く鼻は高く且其線に一種の鋭さを表し尙よくアリアンタイプを思はしめるに充分なる物がある、兎に角立派な作である事を失はない、處で之を奈良の物のくらべると、法隆寺金堂の諸佛殊に止利の作と傳へられる釋迦像及同寺金堂の壁畫西面に阿彌陀淨土の本尊の脇の觀音及勢至の顔面衣紋等に實によく似て居る所がある、何しろ此百濟佛は發掘物であるため考證の資料となるべき何物をも有して居ないために之が年代を定めるのは中々むづかしいが、少くとも私の凡眼を以てしては推古朝を下ることとはなからうかと思はれる、之によつて見ると此佛こそは私の長い間求めて居たもので正に飛鳥朝彫刻の源泉を示すべき物でないではなからうか。私は實に此小さな佛を見た折に云ひ知れぬ喜びを感じた、見ることを許されぬ神祕の境にふみ込んだ様な氣がしたので

ある、然し豫備智識を持たないで見たのと寫眞かとなかなかつたために現今の私は印象が甚しく不鮮明になつて了つたのは残念に思ふ、歸つてから参考になるべき資料を求めたけれども遂に手にはいらず或は私の無識の致す處かも知れないが案外に此方面の文獻の少ないのに苦んで居る次第である、しかし此夏法隆寺の佐伯老師が此地に留錫せられた折に此佛と法隆寺金堂の諸佛との間の關係を肯定されたことを後から聞いた、尙此の外に研究の資料となるべき文獻其他に御氣付の方の御教示を得れば筆者の幸之に過ぎない。

此外に尙一の資料——平濟塔は是れ亦實にいゝ物で私け之は奈良市外藥師寺の東塔に比し得べき物と思ふ、私は又次號に此塔に關する小さな觀察を試みて見度いと思ふ。

### ◆二つの即興

吉田 莊 一

行政整理の大ありしの吹いたあと京城府廳に谷府尹を訪ふと、机上一紙あり、左の句が書れてあつた『つむじ風過ぎて小春の暖かさ』▲府尹は一才氣むづかしい人のやうだが、ナニあれでなく、洒脱な處があるのである▲鈴木商店に澤村さんを訪ふ、殖銀野田さんから來た手書あり、そつと覗いて見ると、左の前書と句があつた米國好景氣の近況面白く拜見仕り候、我國の現状に比すれば轉た羨望の念を禁じ能はず候、呵々

賑はしき隣家羨む霜夜かな

## 伊勢徴古館を見て

朝鮮佛教社 中村健太郎

- ◎私は十一月三日、伊勢大廟に参拜するの機会を得た。そして豫て熟望して居つた徴古館を見ることが出来た。
- ◎徴古館は、内宮と外宮との中間、山田驛から七八丁の處にある。大廟の御寶物を初め、古文書や古代の發掘物が、數多く陳列されてある。また日本風俗の變遷を、時代に依り人形と服裝を、其他器具等により示されてある。
- ◎私の一番興味を感じたのは、御寶物と發掘物の陶器類と風俗變遷の模型である。
- ◎御寶物の内に、發掘された黄金作りの寶劍がある。それが景福宮内の總督府博物館に陳列してある朝鮮の古墳から發掘された寶劍と全く同一型である。
- ◎發掘物の大部分は、陶器であるが、その陶器は、燒きといひ、其の形といひ、慶州地方から發掘される新羅燒と全く同一である。
- ◎石器時代の矢の根も色々陳列されてあるが、この矢の根が、また總督府博物館や李王職博物館に陳列されてあるものと、寸分異がない。
- ◎勾玉なども多數陳列されてあるが、是も亦朝鮮の古墳から發掘されるものと全く同一である。
- ◎日本風俗變遷の模型、是れは古代から奈良朝時代、藤原時代、戰國時代、徳川時代に至るまで、時代を追ふて作られてあるが、就中最古代の風俗は、吾々朝鮮在任者に多大の興味を與ふる。
- ◎それは古代婦人の風俗が吾人の日常目撃する朝鮮婦人の風俗と全く同一であることである。別に説明を附するまでもなく、朝鮮婦人の風俗と大同小異たといへば、讀者には大底想像が付くであらう。
- ◎その陳列されてある模型は、婦人が座して絲を紡いである處であるが、服裝はもとより糸卷から糸を紡いで入れる丸き籠の如き箱に至るまで、朝鮮其儘のものである。
- ◎而かも長き袴を後方に捌いて、片足を立てながら座して糸を紡げる風姿は、：：袴も日本普通の袴でなく：：朝鮮婦人の著用するチマ其儘のもの……何と見ても朝鮮婦人の座姿とより外見られない。
- ◎只だ強いて異なれる點を求むれば、髪の色が現代女學生などの無造作に束ねた日本風の束髪によつてある處と、襟が左胸になつてゐることであらう。

お題目『修養研鑽』

長崎に於て

丸・山 鶴 吉

◇ 『修養研鑽』と云ふことを

お題目に朝鮮を引揚げ申候  
只御題目として唱名する丈  
けでなく、少しは渴したる  
讀書にも親しみ饑えたる思  
索にも耽り度く本當希望に  
満されて浪々の身と相成候  
も、閑雲野鶴を侶とする  
やは古人の筆のすさびに  
過ぎ申さず、矢張り俗人は  
俗人として餘閑乏しく今更  
に繁累多き人生を歎ちたり  
など致し居候。

◇ さはあれ毎朝の乗馬も心に  
任せず、テニスなども途遠  
くて思ふまゝに遊び難き境  
遇に相成候も、自然の配偶  
とや申すべき。一朝にして  
官用自動車に謝絶せられ、

◇ いづれに参り候にも双脚自  
働車をたよる外正確なる方  
法は無之、電車の雑沓を悪  
んでは可成の距離を陸行致  
候、お蔭にて脊中に汗の滴  
ること日何度なるかを知ら  
ず、爲めに運動不足を訴ふ  
ることも今日迄無之、却つ  
て番地探しの爲め精神過勞  
を覺ゆる程に御座候。

◇ 浪人生活後最も『修養研鑽』  
を如實に實行致居候ものは  
脚部の筋肉と番地搜索神  
經とに有之候、只田舎者の  
ほつと出にて能率の上がら  
ざる事夥しく候。

◇ 近頃柄にもなき日本青年館  
の事業に關係することゝ相  
成、一週二度は事務所にも

出勤致居候、地方青年に何  
か吹込み度く、時々地方に  
出て眞劍味にて接觸して見  
る事有之候、すればする程  
大切な事なりとの自覺を得  
候と同時に自らの淺薄と修  
養の不足を痛切に感ぜしめ  
られ申候、いつまで堪へ得  
るやと思ひながら心ならず  
も引摺られ居り候。

◇ 熊本縣人吉町に於ける熊本  
鹿兒島兩縣幹部青年講演會  
の爲めに九州の旅に上り其  
序に各都市の電見の爲めに  
急行を續け居候、昨日は鹿  
兒島瀧端指宿の温泉宿に渡  
邊獨眼子を奇襲し、今日は  
熊本を経て長崎の海港に後  
進青年と快談致し居候、青  
年の辭去したる小間を窺み  
て遙々御健康を奉祈候。

◇ 漢城の天地既に霜氷到りオ  
ンドルの煙籠めたる頃と存  
候に南海の天地小生には春  
の如く暖く感ぜられ申候、  
これより福岡、別府を過り  
歸東の豫定に御座候、頓首

# 運動趣味

鎮南浦體育協會々長 川添種一郎

私に運動記事を寄せるとの御傳言を西崎氏より承り、未見の松本氏にも私の運動すぎが耳に入つて居るのが想像され一寸恥しい気分になつたが、好感を覺えて迂かど廻らぬ筆を執りました。幼少の時から戸外の運動が好きで小學時代には擊劍、水泳、中學時代には山登、相撲、野球、柔道、専門學校では端艇、庭球、柔道一寸弓にも手を出しました。しかしものになつたものは一つもありません。耻氣を感じたのは此のためでせう。

實社會に出ても暇ある時必ずやりました。在英中も庭球、ゴルフは土曜、日曜殆んど缺がさぬ程熱心でしたが依然としてものにはなりません。東京に歸つて多量の青年と好況時代に活動して多忙であつた時でも端艇を作つてやつたり、丸の内に五百坪程の高率な地代を拂つてコートのもつとも備へて共にやり、又の日には關係して居た造船所の職工チームと郊外で野球を競つたりしました。それがため職工達と接近して好感を交へた事もあり、ストライキ流行の際でも三千餘名の其造船所には遂に實現せずすみしました。一端の効果はあつたでせう。

二隻を浮べました。昨年日糖會社にても一隻作られました。現社員に夏季朝五時出勤を強制し、夕刻退社後は、共に庭球を練習し、日曜祭日には野球をやりました。以後約五年間續けて居ます。お蔭で社員の元氣旺盛で盛夏嚴寒に堪へ能く働いてくれます。酒色の弊は皆無となり、物質的給與はお耻しいですが、不平も言はず快活です。私も幼弱であつたそうですが、小學校時代から大思を知りませぬ、まだ盛年ではあります、四六時中旅行勝ですが大概な労働には耐え得ます。

運動出来ぬ時季、旅行中はそれが苦痛です。旅先で諸種の運動競技があれば萬障繰合せて見物に行きせめてもの慰籍とします。競技に加はつて居る時は勿論見物して居る時は無我の境地に居ます。清々しい気分が味はれます。鎮南浦も其後運動熱が高まり、橋本府尹、吉村税關長、本島檢事、近藤病院長、上野女學校長、上原專賣局技師と仲々熱心な運動家が在つてラケットを手にはせぬものは社交界に發言權ない様な気分がありました。それに嬉しい事には鎮南浦名物の春季大運動會です。府の青年達を中心となり當日には諸官廳も各店舗も總出で畢竟全府民、家族、雇人打集つて競技に参加し、觀覽に、應援に、假裝行列に前日來から腐心して所謂官民學つての慰安に平和郷の本體を赤裸々に實現するのです。西崎老豪も角力、ランニングに猛者の名を走せた事實が立證するでせう。而も秩序整然として八、九十回の競技を和氣飄々の中に美事にやつてのけるその鮮かさ、誇大でなく恐らく全鮮に其例がないでせう。競技場を取巻く間口二間乃至三間のヤグラ造りの觀覽席の趣向裝飾、來春是非參觀をお勧めします。私はこの様に運動すぎですが、それを樂しみ得られる様に恵まれてみます、事務的苦惱、疲勞は運動によりて慰籍され、困憊腐蝕され易い私の心身は運動によりて支持されます。私の重なる修養機關です。無邪氣で愈いものであると信じてゐます。

## ◆安藤氏の事

吉田 莊 一

安藤京鐵局長は、毀譽紛々の世評の間に敢然として独自の風格を保つて來た人だが、今度はどうも功成り名遂げて退くことになつた。何も逃げた魚は大きいと言ふ譯ではないが、アノ人にはあれで却々良い處があつた、イヤ非凡な處があつた。▲どんなに反對する人でも、アノ人の男らしさを否む譯には行かない。▲まことにイエス、ノウの明快な人だつた。▲今度退かれたら何をなさる、朝鮮に居られますか——或人が問うと、君今からそんな心配をするもんかネ、そりやアその時のことさ——全くさう考へてゐるらしい——どこか趣向がある、稀に見る風格だと思つた。

南京蟲の記

總督府技師 市 村 毅

◎朝鮮や滿洲の宿屋に泊つて最も恐れるのは南京蟲の襲來であらう一日歩き廻つて身體が疲れ切つて居る旅の人が、堅い温泉の上にゴロ寝してさえ翌日苦痛を感じるのに、不幸にして一晚中南京蟲に襲撃されたならば其結果は實に慘めなものである、彼の褐色の平たい然も醜い恰好の動物は晝間こそ穴の奥深く潜んで居て其姿を見せないが、夕暮頃から柱や壁の割目から現はれて来るのを見るとゾッとせざるを得ない、然し吾々は他に宿る家が無い場合には天幕生活でも營まぬ以上、田舎の旅には如何しても汚い百姓家の一間、二間を借りなければならぬ。

◎田舎は何處でも同じだが山中の村落の百姓家は殊に不潔である、部屋の中を土足で歩きまはる位は平氣なものだが、更に甚しいのになると犬も牛も人間も殆んど雑居の體である、だから家の中へでも這入ると妙な臭氣がブーンと鼻につく、あたりには蠅の群が飛びまはつて居る、其汚さ加減は先づ想像以上である。

◎處は北鮮の山奥の五龍洞と云ふ淋しい小さな村落の百姓家、茂山から直洞を経て次第々々に北の方へ進んで行つた私達は、暫くこゝに落付くことになつた、交渉が纏つて間借りした處は奥の離れ座敷と云ふ格の部屋であつた。

◎小さい開戸から部屋の中へ入つ

て見まはした時、先づ第一に眼に付いたのは壁に點々とついた無数の血痕である、ハ、ア南京蟲が澤山居る哩と思ふと身體中が何處となくムツかゆくなる様な氣がし始めた、ピンテが居る乎と訊くと、澤山居ると云ふた、困つたことになつたと何れも顔見合せて思案の體、そして血痕を眺めては頻に氣にするだけ其點は日本人の方が朝鮮人より氣が弱い、そこで夕食が済んで蠟燭を灯す頃から私達は四圍の壁や柱の嚴密な點檢を行はなければならなかつた、片手に蠟燭を持つて目を皿の様にして上を見たり下を見たり隅から隅まで探して歩く。

◎オヤこゝにも居る、其處にも居ると云ふ位、彼等は隙間や穴に集合して、夜襲の準備に餘念が無い大きいのやら小さいのやら、或る奴は既に匍ひ出して敏捷な態度で壁の表面を走りまはつて居る、チエツ此奴がと思ふとたまらなく憎らしくなつて蠟燭を以て追ひかける、火に觸れた奴はバラ／＼と雑作もなく討死して終ふ氣持よさ、隙間や穴の口に居る奴を針で突き刺して火あぶりにすると悪臭を放つて藻掻き死する痛快さ、それを見て又喜ぶのもこんな場所ではなれば出来ぬ悪戯である。

◎斯うして一々綿密に殺して行くけれど、無數にある隙間や穴に無數に居る彼等はこんなことで到底

底獲り盡せるものでなかつた、終ひには疲勞のためにウンザリして終ふ位であつた、そこで最後の手段として蚤取粉を部屋の周圍に思ふ存分撒いて彼等の來襲に備へる點は宛然小さな戦と云ふて好いだらう、強い香が鼻の奥まで浸み入つて涙が出さうになつて始めて安心する様な有様、そして終に疲れ切つて眠りに入るのが斯かる百姓家に泊つた最初の晩の状況である◎翌朝になつて黄色の粉の中を見ると褐色の姿がうつ伏に又仰向けになつて倒れて居るのが澤山眼に付いた、即ち彼等は蚤取粉と云ふ恐る可き防禦物の爲め我が第一線をも突破し得ず斃れた名譽の戦死者の群なのであつた。

◆竹寒樓逸事

平田久雄

竹寒樓主人寺尾猛三郎氏は、風懐の士である▲本誌にもたび／＼隨筆を書き、文名は讀書社會に能く布いて居る▲處で、最近城北の少年から氏に書簡を寄せて來た、その意味は貴下の風格人物は夙に京城雜筆で知つて居る、處で自分は父と所見を異にし、自分け學問で立たうと言ひ、父は實業で立てと言ふ、私の父には私の稟賦は分らぬらしい、密に思ふに此際父を説得してくれる人は貴下を措いて他にないと思ふ、どうか私の志を憐んで貰ひたい——そこで寺尾さん嘆して曰く、見ず知らずの少年ぢやが、手紙を見ると可愛さうになる、だが何が何んでも未見のおやぢを數から棒に説諭するわけにも行かず、我輩これにはトント困惑しとる——さう言つてアノ美聲を扱くこと回又一回。

百 鍊 翁

京城鐵道局 安藤 又三郎

[ 10 ]

大野百鍊翁は私と同郷——岐阜縣大垣藩の人であつて、子供の頃から儒者野村藤陰先生（前滿鐵社長野村龍太郎博士の嚴父）及び菱田海鷗先生に師事して漢籍並に詩文を習つた人である、一寸話しは餘事に亘るが明治維新當時大垣藩に小原鐵心と云ふ豪傑があつた、處が大垣藩主織田采女正は、もともと徳川譜代の大名であつて例の伏見鳥羽の戦には勿論佐幕方であつた、然るに此の鐵心は仲々先見の明ある人物で天下の形勢を觀取し藩論を覆して勤王主義たらしめんとした、其の爲め藩にて大評定を開く事になつた譯であるが、鐵心は席上藩王及び居並ぶ藩士に向つて堂々と勤王論を力説した、處が満場寂として一人の賛否を唱へるものがない、此時末席にあつた菱田青年（後海鷗）が立つて賛成論を唱へ、遂に藩論一決して勤王論が確立したと云ふ事實がある、菱田先生は幼少より斯くの如き性格にて才氣煥發の概があり詩なども即興にてどん／＼作つたものであるが、之と反對に藤陰先生は温厚篤實な君子人であつた、鐵心は此の全く性格の大反對な二人を信認して總べての事をやつたものである、而して面白い事には百鍊翁は性格は藤陰先生に似て居るが、詩文は寧ろ海鷗先生に師事した、そして百鍊翁は此の人々に師事して

人となり長らく郷里の小中學校に教鞭を執り傍ら詩文を嗜んで居たが、數年前之等との關係を斷つて悠々自適、詩文をたのしんで居り書は眞名海屋に私淑して是れ又餘程の圓熟をして居るが、何分大垣の様な田舎に居る爲め名を天下に馳する事なしに居た、處が大家は自然に現れるもので、現在では詩書共に一廉の進歩を觀るにつれて關西方面に於ては其の眞價を認められて來たのである、會て大阪毎日の詩壇を受持つて居て數年前物故した木曾岐山先生——此人仲々喧ましやのお爺さんで誰の詩でも讚めた事がないと云ふ悪口屋皮肉屋であつた、然るに或人の紹介に依つて此の喧ましやの岐山の處へ百鍊翁の詩を送つたが一向新聞に載せて呉れぬ、ハハハ儲てはあの喧ましや遂々没書にしたに違ひないと思つて其後送らずに居た處が、今度は岐山の方から、ナゼ送つて來ぬか、と催促が來たので又送り始めた處、段々載せて大毎紙上に依つて益々百鍊翁の名前が知られて來た、そして此の定評ある悪口屋の岐山が非常に百鍊翁を推稱して、遂には自分の後繼は百鍊翁を措いて他にはないと云つて居た、然し其當時はまだ／＼充分に百鍊翁の名が弘まつて居なかつたため大毎詩壇は岐山歿後現在の長尾雨山がやつてる譯である。

自分が昨秋百鍊翁を京城に喚んだのは、去年の春京都で翁に會つて一度朝鮮に來て世界的名勝地である金剛山を觀てはどうかと勧めたので丁度紅葉の好い時に來て一週間計り金剛山を探賞して約一ヶ月間自分の家に滞在して方々の依頼に應じて詩書の揮毫をしたのである、百鍊翁の普通人と異つて最も吾々の學ぶべき處は實に名利に恬淡で酒は一滴も飲まず煙草、菓子などは勿論お茶さへ飲まぬ、況んや肉食などは絶對にやらぬと云ふ有様自分の家に滞在中本町青々園の主人倉田君が百鍊翁に會つて『まるで禪宗坊主に會つた氣持である』と評してゐる、隨つて平素の生活なども極めて簡素なもので愚妻なども『先生の様な生活をして居られて何が楽しみだらう』と自分に質問を發した、そこで自分は『其處が變つた處であつて吾々俗物流に酒は飲みたい甘い料理は食いたいと云ふ様な者の眞似の出來ない處だ』と話した、翁は浮世の煩はしい事には一切目もくれず只管好きな詩を作り書をかくのを何よりの樂みにして居られるのであつてそれが吾々の酒食の満足より以上のもので到底俗人では其樂みを測り知る事は出來ないのだと思ふ。兎に角既に六十餘歳の老體でありながら肉食ばかり攝つてるためか身體は實に健全で最近に於ては詩も書も益々老熟して來つゝある様な譯で、全く當世には珍らしい人格者である、其處で翁自身は別に自分の名を弘めやうなんて考へは毛頭持つて居ないが、郷里の人々の間には何等かの方法に依つて此の大家の名を弘めやうとの議が盛んなので今回自分が朝鮮迄も喚んだのである、京城では各所の依頼

京 城 雜 筆

にも應じてるが特に總督官邸及び  
金剛山特産物で有名な本町の龜屋  
其他三四軒には屏風並に金剛山の  
詩を書いたものが遺されてある。  
自分の家にも書いて貰つてある、  
兎に角平凡な様だけれども當世稀  
に見る風格者を京城雜筆に依つて  
諸賢に紹介し併せて金剛山雜詠を  
左に掲ぐることにする。

明鏡臺

明鏡高懸鳥似臺。群鸞擊出翠屏開  
空潭直下菱花水。只任仙娥照影來

水簾洞

挽得天河一滾來。水簾斜下勢崔嵬  
悄臨怪石千尋底。鐵拐蝦蟇巨口開

靈源菴

寒流紅樹映千溪。附與隨人曳杖藜  
一去高僧無可叩。古菴只見白雲栖

望軍臺

萬壑千峰落指揮。望軍臺上握天機  
豈言眼界惟空闊。數點神鳥脚下飛

萬瀑洞

滿壑縱橫巖壁重。林泉奇絕箇中鍾  
大乘橋上植筇筍。噴雪瞻寒獅子峰

正陽寺歇惺樓次韻

寒山石徑振衣遊。萬二千峰紅葉秋  
故故天風吹不息。白雲歛影歇惺樓

摩訶衍

疊嶂深林路欲分。摩訶衍裏叩僧聞  
喫茶幾碗日猶午。君向毘盧吾白雲

白雲臺

白雲臺上白雲空。颯颯唯聞下壑風  
絕頂橫身四千尺。秋天一碧玉玲瓏

溫井鎔頂作

溫井鎔頭停杖時。滿身汗雨冷風吹  
忽然脚下乾坤圻。朗點金剛海上姿

萬物相

縹渺斯身物我齊。三仙巖角倚雲梯  
何時飲盡千尋綠。王女峰頭住彩霓

寒霞溪上作

寒泉聽盡又寒霞。不覺羊腸石徑除  
今夜山中何處宿。夕陽黃葉認人家

神溪寺

龍膽鷓頭色色花。秋芳供養梵王家  
玉溪進路尋童子。笑向南天指彩霞

(峰名)

金剛洞門  
前路勃然雲往遠。同人結束躡衣攀  
九龍面目從茲見。要破金剛第一關

玉流溪  
飛鳳、舞鳳、玉龍、水簾、連珠  
皆溪中諸勝名。  
鳳凰飛舞玉龍游。滿溪紅葉白雲秋。

欲乞山靈珠一顆。水簾鷓翠任人收  
九龍淵  
八潭積水一時傾。千仞懸崖風雨驚  
却怪九龍何處壑。深淵底破寂無聲

旅の恥

高木背水

今から二廻り程の昔の頃余  
は未だ志を得ず貧乏書生で  
あつた(今だつて貧の字は  
免れないが)。

北米聖路易市にうろづいて  
居た時、オリイブ街で電車  
に飛び乗つた、綠色に塗つ  
た車内に入るに馬鹿に廣く  
て其の時の乗客が甚だ少な  
くてがらんと居つた。  
僕が這入ると同時に先きの  
突當りの入口から一人の客  
が入つて来た一見貧乏たら  
しい顔の色は蒼色目玉も頭  
髪も眞黒で然かも手入れを  
せぬと見へて甚だ粗雑であ  
る。  
彼奴はフキリツピン士人か  
知らと一寸思つたが何とな  
く顔に見覚えがあるが何分  
遠くて確と解らん、近づく  
つもりで進むと先方からも  
進み来る、近づく程に確か  
に見覚えがあるが何しろ嫌な  
奴だ。

何處で買ふたか知しん寸の  
合はぬだぶくの服を着て  
色の褪めた安い帽子を無格  
好にかぶつて居る、眞黒な  
頭髪は伸びて帽子の下から  
はみ出してる、確かに知人  
には相違ないが誰と云ふ事  
が何うしても頭に浮はぬ。  
今少し近づくとも先方も近  
き来るハテナと思つて右手  
で眼を擦ると先方も其の通  
り眞似をする。  
ナニコン著生奴!拙者を馬  
鹿にする奴だな多分聖路易  
博覽會に集つてる日本人の  
アメゴロの一人であらふブ  
ン殿つてやれとばかりにム  
カツ腹を立て、當時血氣盛  
んな佐賀武士の吾輩は腕に  
覺へのあるに任せ、ツカツ  
カと近づけば先方も亦恐い  
顔して近いて来る、何を小  
癪な……『君は誰だッ……  
』と日本語を以て大聲を張  
り擧げたが何の事だい自分  
の姿が鏡にうつつて居た。  
車掌は此方向いて笑つてる  
とんだ失策だわ、旅の恥は  
掻き捨てとは此の事か。

# 繪の話

殖産銀行 深尾道恕

この前私は『謠の話』を本誌に寄書した、すると或る謠曲の天狗は深尾が謠の話をするなんて、潜越至極だと云つたそうだが、それで今度は繪の話をして、同門の繪天狗に、深尾は潜越だと云はして見度い。

私は内證で繪の稽古をする積りだつた、所が人の悪い寺尾公天氏が雑誌上に擔板會の記事を書いて私のことをもすつばぬいたりしたこんな事で時折友人などが、君は繪を描くか、關位は描けるかと云ふ、松本君も正に其の一人である私は此の種の質問か擲論かを受けたとき、毎度當惑する、それは關が一番六ヶ敷いからだ、知らぬ人は未だ關が描けぬと云へは變に思ふかも知れぬが、なか／＼そう旨くは行かぬ、關の葉が木賊になつたりするのは上の部だ、どうかすると萎びた葱になつたり、使ひ古しのシデ紐の様になる、あの一葉が旨く描ける様になればしめたものだが、どうして／＼そう容易には參らぬ、竹も亦そうだ、竹の直幹はまだしもよとして、その葉に至つては難中の難物だ、下手にやれば葉は徒に重なり徒に並んで始末に行かぬ、修正を加ふれば加ふる程、葉は雜然として重疊し、葉にも見えれば力もない、要するに關竹は吳蘇かしでは描けぬ、こゝが關竹の面白いところで又難物

たる所以であらう、山縣素空居士や野田大塊宗匠の關は、拙いと云ふ人もある様だが、あれまで描くには、御本人としては一通りの努力ではないと思ふ、餘り人の批評はせぬものだ。

竹に付て思ひ出すのは伊勢の儒者土井贅牙である、先生磊落不羈、好んで墨竹を描いた、私もその一幅を愛蔵して居るが、筆力雄健墨色淋漓、誠にその爲人を想像するに足りる、先生は肥滿な實で、人一倍暑熱に苦むので、夏になると何時も素裸で唐紙に臨むだ、先生熱いので麥酒でもしたたかやるものと見えて、時々その雄健な墨竹の上に、黄金色の汚點を落した、それで先生一向御頓著がなかつたと云ふ事だ。

私は贅牙のこの境涯が、たまらなくうれしい、人はよく繪は禪だ精神統一だなどと氣のきいた事を云ふ、私等同志の會は名つけて擔板會と、禪に因縁を結んでる位だから、或はそんなものかも知れぬ、然し皆が繪を描いてる所を見るとまだ／＼禪とか精神統一とか云ふ所には到つて居そうにも見えぬ、人なかで筆を執ると、大抵の人は皆手が震へる、鬼でも擲きそうな豪傑まで、手の先筆の先に小さな揺ぎを見せる、人のことを云ふのではない私も全くそうなのだ、こんなことではいけないと思ふが、

震ふものはやはり震ふ、繪を描くと云ふことよりも震ふまいと云ふとに努力する、こうして堅くなればなる程益々工合が悪い、小禽の嘴や足がとんでもない格好になる贅牙に至つては紙を汚そうが破らうが、心は唯だ墨竹の中にあつて更に餘念がない、俗念がない、之が三昧の境に入つたものだ、私は紙を汚そうとはさら／＼思はぬが震いたくはない、彩色を用いて、絢爛とまでは行かずとも、友禪模様式の俗眼を曳く繪は出来やうが關竹の如き氣品を尊ぶ繪は、手の震いがやんでからの事である。話が些と理に墮ちた、天狗の御叱りを受けぬうちにやめませう。

## ◆西村氏の事

平田久雄

十八銀行支店長の西村さんは、本誌に多大の同情を有つて居る人だが、それだけ雑誌は能く読んで居てくれる▲『我々には文章の巧拙は解らぬが、十二月號で面白く讀んだのは飯泉氏の稿だ、あれを讀むとさながら同氏と卓を圍んで得意の世間話を聽いて居るやうで、氏の面目生動といふ趣がある、寔とに近ごろの快文字だ……』▲處で同支店には頗る讀書家が多く、本誌の如きも支店長に行くのを一同で引張り合つて讀んで居る▲由来『十八』と言へば、本誌とは可なり因縁がないでもない▲といふのは、同行釜山支店長の永見氏は本社町人氏と長い交際であり、又創刊以來の後援者で、手紙のたびにうまく行くか／＼と心配してくる、頗る友誼に厚い人である。



あ ま つ 旅

前殖産局長 西村保吉

はしがき

大正十二年十一月十日平壤航空隊をおとづれけるとき、隊長堀中佐の勧めらるゝがまゝに、飛行機に打ち乗り、七百米突の高空を飛行すること二周約十五分間、思ひしよりも安全にして心地よかりき、此の飛行機は『サルムソン』式偵察機にて重量約一噸、本日の速力は一時間約百二十哩なりしといふ操縦者は鈴木中尉とて、隊中の熟練家なりとぞ。飛行中の所感を拙なき歌にだも書きのこさばやと、機上にて書きつけしこと、思ひしことどもを取りまぜて左に誌すになむ

甲子初秋 大和町官舎にて

時のまに視界廣がりつぎつぎに山のそびらの見えわたるかな  
天くらく地かすかなり鮮けきはただ飛行機と我と操縦手  
機に觸るる風は暴風に似たりけり風なき空と人の言へるに  
人の世の音はも絶えて聞くものはただ鳴る風とプロペラの音  
みそら來し天津乙女の羽衣の旅路やいかにのどけかりけむ  
風の音は鳴れどひとけど天かける機は靜かにて書かくによし

厭はしくプロペラの音は聞ゆれどかしましき世の聲にまされり  
けたたましき怪しの音は天津神の午睡のゆめや驚かすらむ  
通話機は手にだも觸れず操縦手の辛きころを妨げじとて

ガソリンの爆発しなば火となりて我も燃ゆらむ淋しき思ひ

いざさらばしばしば行て來む天の旅磯土をはなれし心地しるべく

斷然と乗るとし言へば今更に勸めしひとの顔は曇りぬ

さらばとて機上の人となる我を危ぶむげなる群れの眼ざし

猛然と地をはなるゝ一刹那漆き誇りの胸に浮べる

獸々と靜もる地を下に見て我が行く道の遠み遙けみ

勇ましく乗りは乗りしが吾妹子のいかに思ふと思へば苦しも

藏せ妹再び罪はつくるまじひとたびすれば我が事は足る

立ち並みて見送る友のひとむれ

は見つゝあるまゝほそり細りて  
視界より地上の友は消え失せぬ  
我をいかにと友は見ゆるらむ

人見えず家居もとみに細りゆく  
幾千尺の空に我が來し

煙草欲しと思ひつゝふと心づき  
機寸取る手をそと離しけり

みづからを恃む力は絶えにけり  
おのがすべてを人に托して

みづからの力絶えぬと知りし時  
ふと操縦手をうらやみにけり

急角度に機體回轉てアツとばかり  
叫びし將軍を眞似じと思ひぬ

みそらゆく心の空は冴へわたり  
罪も汚れもわづらひもなし

財界の前途

岡村介石

今後猶ほ舊の如く不景氣を云々するは陳腐だ、節約はせよ、貯蓄をせよ、以て十年の仇敵を待つが如くに内に力を充實して、萬遺憾なきを期するは當然である、乍併最早や不景氣を啣つて澁面太息するの秋ではない、此際何を買へば近き將來に有利なるか、此機を利用して何を計畫するが前途有望なるか、各自の力量に應じて善處する方法——買出動すべき物と價格を考慮研究すべき絶好の時機である  
大正十四年は不景氣の末尾にて同十五年は好景氣の初頭に當る、潜龍田に現はれ、飛龍天に昇るの時  
は茲に數年の裡に來るのだ。

# 牛の花嫁

蝶 炎 今 村 鞆

朝鮮の古書の中にある譚あがたりの一つを書いて見よふ。夫れを小説體に書くと、面白く書けるが、餘り長くなるから、カイ摘んで筋書丈けとした。

洪郡守は三年瓜遞の期満ち近日新任郡守が到着すると事務引繼の上京城の自宅に歸らなければならぬのであるが、唯困るのは任期中清廉潔白で通して来たために自宅へ歸つた時、妻子親族を喜ばすべき何等の土産が無い、已ならず邑内に多額の負債がある、差迫つた問題として、當惑を感じて思案に凝つて居るが、よき分別もない、果は自己が遵奉し來つた孔孟の教へと云ふものに疑ひを懷いて、沈鬱な表情をしてジツト考へ込んで居る、場所は或る山奥の郡衙の一室である。

其所へやつて來たのが首席

◆ 金主事である、郡守の貌を見て、貴方の心配事はよく判つて居る、夫れは何んでも無い事である、一つ人に知れない悪事をやれと勸める、郡守は悪事はやれぬと云ふ、主事は然らば負債はドー始末するか、空ら手で歸宅して家族や親戚に罵られた時にドーするが、清白吏と云ふ名譽が何になるか兎も角悪い様には取計らぬ、私にお任せなさいと説破する、郡守は心が動いて背に腹は代へられぬと主事に一任する、而し主事は其の方法を語らないから、郡守は幾分か不安である。

◆ 其夜深更、主事は郡守を同行し、微服して闇を縫ふて邑内をたどり行き、町外れに在る邑内一の金満家の門に到着する、躊躇する郡守を強いて拉して、垣を越へて邸内に忍び入り、物置の戸を破つて其中の侵入する而して用意の臘燭に火を點

する、正直なる郡守は慄へて居るが、主事は平氣である、躓て其物置の中に隠せる酒瓶の蓋を取つて、中より酒を掬し盛んに痛飲し、郡守にも勸める、よい鹽梅に酒が廻つた頃、主事は傍若無人に唄を歌ひ出す、郡守は氣が氣でなく頻りに止めるも、一向頓著せず、益大聲を發して上機嫌で騒ぐ

◆ 此物音を聞き付けたる金満家の下男共、泥棒推參なれと、手にく得物を携へドヤ／＼と物置へ迫つて來る主事は燭を消して逸早く機敏に逃げ去り、マゴ／＼せる郡守は闇の中に捕へられる、兩手兩足を縛ばられる小厮等は明朝郡衙に訴へる迄泥棒は斯ふして置かふと郡守を有合せの麻の袋に入れ樹の枝に吊り下げる。話換つて此所を逃れ出たる主事は、反對の方面の小屋に放火する、火が燃へ上ると共に、家人一同大騒ぎとなり、其方角に駆け付ける其虚に乗じ、主事は此家の老人、其人は老耄して唯生きて居る丈の人間を、離坐敷より擔ぎ來り、素早く袋の中の郡守とすり替へ、二人手を携へて逃げ歸り、何喰はぬ貌をして居る。

翌朝、放火窃盗犯人として麻袋を擔ぎ訴へ出て来る、主事は其袋より犯人を出せと命令する、出て来た人間は其家の老人である、一同意外に驚く、主事は、老父を捕拿して訴へ出るは親不孝の大罪人なり、罪死に當るものとし、其家の主人を拘留する、金満家の方では大變な事になつたと、一同心配、親族評議の上多額の賄賂を使ひ、内済にして貰ふ、主事は赤舌三寸是れで目的を遂げた、負債も拂ひ自宅への土産に仕なさいと其金を全部郡守に渡す。

◆ 新任郡守は著任し、萬事引繼を了して、洪舊郡守は諸人に惜まれて出發する、其翌日、新郡守は突然金主事を捕拿して法庭に下し鞠尋する、主事は四圍の情況から判断して、舊郡守が、彼の一件の發覺を恐れて、何等かの冤罪で自分を陥れ、尋問に假りて新郡守に、杖殺せしめる魂膽であると云ふ事を曉ると共に、此危急の機を免れ出づべき方法を考へる、フト見上げると、新郡守は片眼か眼病である其の瞬間に機智がひらめいた……俺が斯ふ云ふ運命になるのも、前郡守の眼を癒

してやつた事が原因だ、ア一詰らないと吐息と共に、獨言を言ふ……郡守は數年來痼疾の眼病で苦しんで居る矢先であるから、これは耳寄りの話したと、主事に其委曲を語れと云ふ、主事は夫れは言はれぬ、併し眼病はドンナ難症でもキツトマジナイで癒して見せると斷言する、仍で縛めを解き今夜其治療を行ふことを約束して、主事は歸宅する。

◆ 約束を守り、其夜郡守は金主事の宅を訪問すると、酒肴を調へて大に待遇する、酒は眼病に毒ではないかと聞くと、飲酒も其治療の方法だと、無理に勧めて爛醉せしめる、早くマジナイをせよと迫る、主事はやがて一匹の牝牛を庭に牽き來り之に對して或る方法を行へと云ふ、郡守は考へて躊躇する、主事は前郡守に此秘密がありたればこそ、自分は讒せられて死境に陥つたのである、確かに目がよくなる、早く實行せよと迫る、郡守は亂醉の餘り其言を信じ、病には代へられぬと思ひ切つて實行する。

◆ 翌朝になると、郡守の眼病は大酒と實行の爲め益悪く

なり一方のよき目まで悪くなる、扱は欺かれたるか大に腹を立て、早速部下に命令して、再び金主事を捕へ來れと云ふ、丁度其時邑内の町は人だかりで騒がしい、何事かと思れば、金主事は昨夜の牝牛を美々しく粧り、人間の著物——夫れは婚禮の時に用ゐる物を被せ、件の牛を花嫁に仕立て、婚禮の行列に擬し、鳴物入りで『コレハ新任郡守の令夫人である昨夜正に……』と大聲に口上を述べて邑内を練り歩いて、郡衙の前の廣場に來た、此有様を一見したる郡守は、七面鳥の如く青くなり赤くなり坐つても立つても居付かれず、怒つても悔ひても追付かず、これでは到底郡守の體面を維持し得ぬと、其夜密かに夜逃げ同様に出發した。

◆ 此物語は單に滑稽なる一笑话であるが、見様によりては、一種の訓話とも爲し得るのである、夫れは鮮人の機智、巧智乃至狡智の豊かなる蘊蓄と、夫れを隨所に仄かして、一擒一縱、上長を醜弄する手腕と云ふものを巧みに表徴して居るからである。

# 大黒天

京城佛教慈濟會

小水眞二

有大神力壽無量千歳八臂身青黑雲色二手懷中横把三戟又右方二手捉一青羚羊左方二手捉一餓鬼頭警右方三手把劍左方三手執錘叱問迦梵語也是一體體憶也后二手右於肩上共張一白象皮如披勢以毒蛇貫穿鬪體以爲瓔珞虎牙上出作大忿怒形雷電煙火以爲威光身形極大足下有一地神女天以兩手承足者也

と、又仁王經良賁疏に、大黒天神闘戰神也若祀彼神增其威德舉事皆勝故擲祀也。又孔雀王經に、所作勇猛闘戰等法得勝也故大黒天神神即闘戰神也。ある所より見ると、大黒天は印度に於ては仲々恐るべき威大なる力を有し、犍猛の神として一般から崇められて居た事が分る。其れが支那を経て日本へ來てからは其土地にあはぬ相貌性質をかへて人の好きそうな柔らかな福相をなすやうになつた邊から見ると、大黒天は仲々剛好者で今迄の看板の塗替へをつまみやつたわけである。最も大黒天の本神濕婆神には破壊的な方面と再生的な方面とがある、其破壊的な方面を

何でも素性を調べて見ると、種々の事柄が解つて來て云ひ知れぬ興味を感じしむるものである。七福神の一つとして民間に崇められて居る大黒天といへば、無量長壽福徳圓滿、財寶の神として神棚の中や、床の間に柔和な相貌をして御座るが、其の素性を洗つて見ると、仲々どうしてもとは荒々しい犍猛を形相の神さまで、或時は民間から恐れられて僅に敬遠的信仰を繼いで居た事もあるが、其れがいつの間にか福々しい相を吾々に見せるやうになつたのである。其處で『大黒さん素性をかくして仲々味をやるわい』位で済まされなもののだからつい其素性を調べて見たい氣になつたわけである。大黒天の戸籍を見ると、本籍は印度で支那が前居住地、日本が現籍地といつたような譯で、三國を股にかけて居た神さまで、終には現籍地の日本へ來てからは全然日本の神様になりすまして御座るようである。

元來、戸籍の上で明かな如く大黒天は印度最古の神さまで、梵語では『摩訶迦羅』ともいひ、又は『摩訶迦羅濕婆羅』ともいつて居る希麟の書に、摩訶迦羅梵語也、摩訶此云大迦羅此云黑經云摩訶迦羅大黒天神唐梵双舉也と。又大日經疏に、

摩訶迦羅大黒天神又云大闇夜天云迦羅纒黑闇

といつて摩訶迦羅を大黒と釋してある。所が七母天集會品に、

摩訶迦羅者大時義時謂三世無碍礙義大者是毘盧遮那法身無所不偏也

と譯してある。即ち迦羅を時の義として居るが、此の方が本義であろう、支那の學者が迦羅の別義をとつて『黒』と譯したものである此の摩訶迦羅はベータ時代既にあつた神様で、アサルバベータの中に、迦羅に仕ふる信仰を書いて居るところから見ると、迦羅を時の神として居たらしい、古來の印度人は時を以て一切萬物の發生の根源と考へて居たところから見て、時の信仰の對象として居たとも見へるのであるから、此意味から見ると迦羅を時と譯した方が本義であらう。此等から考へて見ると佛教以前から既に印度に存在した神様で摩訶迦羅濕婆羅の文字を見ると、愈々其れが古代の神様としてたしかである。

以上の事柄丈で大黒天の生れは暑い印度で、初は時の神として尊敬されてあつた事が分る。其れで時の神様として丈信仰されて居たかといふと其れ丈でなく戰の神様としても信仰されて居たこともある慧淋の一切經音義に

摩訶迦羅梵語也唐云大黒天神也

## ◆山

平野 天 桂

山の邊の我ふるさとの朝な夕な山見てありし山のこひしも

印度であらばし、再生的のやさしい部分を支那殊に日本であらばしたわけに日本に來てからは財福々徳の一枚看板をあげて現今に及んだのである。

大黒天の支那傳來は唐の太宗の時と見た方が適當であらう。支那にては戰の神として信仰された部分もあるが、財福神としての信仰は

強かつたのである。義淨の南海寄歸傳に、

又復西方諸大寺處或於食厨柱側或在大庫門前彫木表形或二尺三尺爲神王狀坐把金囊却蹠小床一脚垂地每將油拭黑色爲形號曰莫訶阿羅即大黑神也古代相承云是大天部屬性愛三寶護持五象無捐托求者稱情但至食時厨家每薦香火所有飲食隨列於前

と記してある所より見ると、印度の其れとは異り、又た日本の其れとも異つて居る。殊に日本に來てからは種々の古事から附會した部分が多いのである。普通民家に重要な支柱を大黒柱といふは此の寄歸傳の食厨柱側に大黒天を祭る風から轉化したもので寺の妻君を檀徒が大黒さんといふのは之が悪く轉化したものであらう。

大黒天を施福神としての本據は寄歸傳を正とするが、然らば其福神としての風貌はといへば、秘密儀軌に『吾體作五尺若三尺若二尺五寸亦通之膚色悉作黑色』と。又寄歸傳に『坐把金囊却蹠小床一脚垂地』とあるより見れば、決して恐ろしい相でないことが窺はれる。黒色である事は印度では神佛の供養をするのには油を常に注ぐ風習がある、之が爲に黒色にしたといふ説と、迦羅に黒色の義あるから黒にしたものだといふ説とがあるが二説併存して可なるものであらう。

日本へ大黒天の渡來されたのは平安朝の末期に傳教大師の歸朝と同じとされてある。傳教最初に叡山示深院で二面の大黒を刻して施福を祈願したことが和漢三才圖會に出て居る、其文に

大黒示現於傳教大師曰我每日供養一千人以護寺院也大師曰我山

有三千人衆徒請永供養之大黒許諾焉而乃比叡山三所各建大黒社以爲護法神。

とあるより見ると施福神としての大黒天を見ると三面の相を形ちづくる邊は印度の風を脱せない感がある。日蓮上人に至りては大黒天をよほど信奉されたようである、大黒天送狀(偽作)に。

法華經之外不認大黒天と、更に一步を進めて曰く『昔之大黒天者今日蓮是也』と。其信仰の程度を知る事が出来る。

日本へ渡來してからの大黒天の相貌は著しく變化して來て居る、即ち日本化して居るが之は種々の俗説を附會した事よりあらはれたわけである。殊に甲子の日を配し槌を持たしめて米俵の上に坐し、或

は立たしめ烏帽子垂衣を著けて大袋を負はせるが如きは取るに足らぬ事柄である。佛教の盛となるや本地垂迹説の流布となり大黒天も日本古代の神様に入籍し大國主命の代身なりといふに至つては無智な悪戯である。其れは何にもせよ印度古代の神である大黒天が、其當時の神相を全然かへて日本に現はれて以來施財の福神として日本俗間信仰の對象として今に至る迄大なる威力を振つて居るといふ事は非常に面白い事である。

以上極ザツと大黒天の素性を調べ終つて床の間の大黒天を凝視すれば『とうとう俺の素性を素破抜きよつたわい』と。柔和な顔をして相變らず福相を呈して御座る。

◆鎮南浦から

岡谷 すみ子

今年も又冷たい雪が降り出しました、外には木枯が吹き荒んで鎮南浦も全く冬になつてしまひました、湯豆腐で一杯は叔父さまの領分おしるこは叔母さまと私の領分、一昨日は大好物の金剛しるこを送り下すつて有がたく存じました。

冬の夜長のつれづれを松の實浮くおしるこを頂戴しながら金剛山の會遊を偲びつゝ夜長侘びをまぎらして居ります。

松の實のしるこ愛でつゝ、ありし日の金剛山を語る夜半かな

◆奉天府から

廣江 澤次郎

十二月號には『煙草昔話』と云ふ題目で煙草史談を一篇辨じ上げようと丁度原稿を書き終つた十一月十二日の晩清楚たる装ひをした十一月號が到着した、然るに之は驚いた私の原稿と大體同工異曲の物を青木專賣局長が機先を制しサツサと失敬してゴ座る、而も青木さんの意地悪!『續』として翌月號迄其領域を完全に占領済、青木さんの機敏と徹底には一本參つた、コンナに原稿が舐め相摩す様になつたのも家繁昌の表裏、一雜筆萬々歳。

世 界 語

不二興業株式會社 藤井寛太郎

松本氏の京城雜筆は號を重ねるに隨ひて益々盛大に毎號諸方面の人々の筆に成りたる面白き文章を見る事が出来、流石に多忙の身も此雜筆だけは配達を受くると共に一讀するを樂んで居る次第である。特に近來は益々寄稿者も澤山の様で我々多忙且拙文者が参加する必要は無かろうと思はれるが、松本氏より度々の催促に依り新年號に此漫筆を出す事にしたのであるが、京城雜筆の記事としては甚似合はしからぬものゝ様である。然しお正月の事であるから少しく改まりたる偶感をも許されるであらう。

歐洲大戰の後半——米國の參戰以來大統領ウイルソンの意氣は實に天を衝くが如きもので其戦局も米國參加の爲めに勝利に歸し、世界の人類を自己理想の儘に導き得らるゝ如く信じて居つたに相違無い。さればこそ民族自決とか國際聯盟だとか言ひたい儘を主張しても一時世界は其勢ひに隨はねばならなかつた程盛んなものであつたが、一たび自己の理想が世界どころか自國民の養成をも得られぬ事が明確となつて急轉直下世界第一の大偉人は平凡なる一神經衰弱患者たるに至つた事程左様にウイルソンは世界を自己の理想化せんとして居たのである。國際聯盟の如き未だ單に一つの形式的のもので到底是れに依つて世界の戦争を防止する如き事は思ひも寄らぬ事ではあるが漸次其理想に向ふ一つの階梯たるは疑ひ無き所である。然るにウイルソンが如此國際聯盟の大理想に『世界語』を逸して居る事は何とした事であろうか私は常に不思議に堪へぬ所である。國家が分立して居る以上互ひに其利益を保護せんが爲めに争ひを生ずる事は止むを得ぬ所であるが、言語風俗の相違が一層其人情をも疎隔せしめて居る事は明かである。特に其言語の不通より争ひを生ずる場合は最頻繁であるから世界の言語を統一する事は何物よりも國際聯盟の上に効果がある事は勿論である。世界の言語を統一する事は單に國際聯盟の上に効果ある計りで無く世界の文明は實に其實現に依りて驚くべき

大進歩大躍進を見る事であらう。現今世界語として『エスペラント』があるが未だ一國者の案出したものとして國際的に其權威を認められて居らぬのと矢張り或一國人の案出せるものとして其の國以外の嫉妬心に妨げられて世界的に尊敬せられ難い點が生ずるであらうから、さうしても國際聯盟に於て世界中より委員を出し、是等委員に依りて制定せられたものとすれば眞に世界語として實用せらるゝ事であらう。其骨子として『エスペラント』を用ふる事は最便利で是れを更に世界中の委員に依り不便を除き各國の特色を加味し新たに便利なる新案を加へれば益々完全なるものが出来るであらう。斯くして一つの世界語が出来たならば世界の各國は自國語の外に必ず此世界語を中學以下の各學校の義務教育として學ばしめ他の外國語は一切廢止する事とせば十年ならずして世界中至る所世界語の通ぜぬ所無く世界文明の發達上如何に便利であらうか今より想像するも愉快に堪へぬ人類の幸福と言はねばならぬ。特に我日本の如き其文字の不利より生ぜざる國民の損失は到底想像も出来ぬ。私は常に旅行の度毎に外國人が急行列車の疾走中『タイプライター』にて自由に完全な書面を作りつゝあるのを見る毎に實に羨望に堪へぬのである。今頃漢字の制限だとか、假名文字會だとか、羅馬字會だとか、眞に日暮れて途遠しである。大學を出た學士連中でも其專攻せる外國語を常に自由に用ひ得る者が幾人あるか。此役に立たぬ外國語の爲めに中學より大學を出る迄どれ程苦しんで居るか實に不經濟極まることでは無いか。英文科出の學士は佛獨の書物は讀めず、佛獨文科のものは英米の書物は分らぬ現狀であるが、一たび世界語が行はるゝ時となれば國民は第二の國語として悉く眞劍に是れを學ぶに相違無い、亦左様する事が我國の大利益である、然らば國民は悉く世界中の書物が自由に讀める、此場合世界文明の進歩は想像に餘りある所であらう。此世界語は世界人類一般の大利益であり大幸福であつて眞に國際聯盟の目的に近づき得らるゝ最も大なる方法である。世界中の人類が至る所自由に親しく語り合ひ得らるゝ事が如何に平和の爲めに効果あるかは考ふる迄も無いことであらう。特に我國の如きは一足飛びに世界最良語を用ひ得る點に於て歐米諸國よりも利益の程度が一層多いのであるから（東洋諸國は何れも同様ながら）眞劍に國際聯盟に提案し目的を達する様に努力せねばならぬのである。私は常に是れを思ひ出すのであるが業務多忙の爲めに到底如何共する餘裕が無いので忙中寸閑を割いて先づ京城雜筆に是れを發表し識者の一考を求むる機會を得たいと思ふのである。

雜筆推讚

— 人格の力の偉大を思ふ —

木浦公立小學校 吉村貫之

私は人格の力の偉大さを嘆賞せず  
に居れない、昔は天圓地方と云ふ  
て大地を平たくて四角な動かぬも  
のとして居つたが今はそれを圓く  
して動かして居る、それ計りでな  
く神様も佛様も人間が作つて居る  
少くとも人格の力がそれを見出し  
たと云ふ事は事實である。

或る一國の統治、一家の一代—  
一事業の成績について熟視すると  
そこに一々人格の力のあらはれを  
見出される、近頃第四側面など云  
ふ言葉がぼつ／＼見られるが體に  
人間は今や形而上に向つて偉大な  
働きをなすつゝあつて人格の力の  
如きが其の唯一の先導であらねば  
ならぬ。

私が『京城雜筆』を讀むの光榮を  
得たつたのは本年の四月分からだ  
ある、成る程雜筆で其の寄書家  
見ても、あらゆる階級や職業より  
出來て、其の寄書を見るに至つて  
更に千種萬様で、平地があるかと  
思へば谷があり流れがあるかと思  
れば忽ち斷崖、滿洲平野を汽車か  
ら望む氣分を起すかと思へば吉野  
の花、高雄の紅葉を眺むる感じも  
起る、洞庭や千山の景も松島や耶  
馬の風趣も逆も此の一冊の雜筆に  
及ぶまい。

しかもその間に一脉の泉が滾々と  
して流れ、この絶妙な風趣を統合

して居る、それは如何にも滑稽で  
あつたり皮肉であつたり或は樂觀  
であつたり悲觀であつたり乃至は  
不平であつたり満足であつたりし  
て筆致が如何にも輕快であるかと  
思へば慎重であるものもあつても  
そこに何人も一つの同じ道をたど  
つて居る、それは私の見るところ  
では實は眞面目であると云ふ事  
である。

『京城雜筆』と一言に云へば閑人  
の閑文字を集めた早く云へば當今  
に用の無いものゝやうに思はれぬ  
事も無いが、それは甚だ皮相の見  
で現に寄書する方々は何れを見て  
もそれ／＼繁忙な貴い仕事にあつ  
て、寸陰を之れ惜む人々のみであ  
る、その人々が忙中の閑を以て此  
の大なる思想上の産物を御出しに  
なる事だけで己に大に感謝に値  
し此の紳々たる餘裕あることを欣  
慕せずには居れないのに、此の中  
にある一脉の流れ—眞面目と云  
ふものを見るとき、私は我が國運  
の將來を望んで大なる歡喜に入ら  
ざるを得ぬのである、そしてこそ  
には本誌の主幹者の人格と云ふも  
のが不知不識大なる反映をして居  
ると云ふことを認めざるを得ぬ、  
と云ふとカッゲやうに、不まじめに  
考ふる人があれば同氣相求めると  
云ふてもよい、とにかく眞面目の

下に幾多の人々の意志が合致する  
ことは此の不眞面目な社會に於て  
珍らしい事であると思ふ。

澤山な雜誌新聞—それは社會の  
木鐸さか耳目とか云ふて傲然とし  
て居つても、やつぱり賣る儲ける  
と云ふ事が主になつて居る、そこ  
に此の商賣氣を放れた雜筆の様な  
ものゝあることは正に群鷄中の一  
鶴で私はそれを經營する人々に感  
謝すると共に之を協賛する紳士紳  
商諸君に感謝せざるを得ぬと同時  
に此の中に磅礴する眞面目な氣分  
が益々長大せらるゝ事を望むもの  
である、我國の現代に欲しきもの  
は此の眞面目であり此の人格の力  
ではあるまいか。

◆八と言ふ數

吉田 莊

我京城雜筆社の大家<sup>おほや</sup>さんを岩間元  
次郎氏といふ▲頗る能く解つた人  
で、町人一家とはまるで親類つき  
合ひである▲毎月の雜誌の發送時  
などは「岩間さん頼みますよ」と  
聲をかける、忽ち煙管を捨て、  
「ヤー出來ましたナ」と這入つて  
見へる▲今年六十餘歳だが、一生  
を「八」といふ字で送つたといふ  
「八」とは限八分、家計八分(月  
收の)、處世八分—總て多少の  
餘力をあますといふ主義、それで  
四人の令息は悉く大學を出で、今  
では老體を菊作りや盆栽に委ねて  
居る、頗る安泰なお方▲處が、十  
二月の野田さんの「運命觀」を讀  
み岩間さん頗る同感「この天命を  
かしくむと言ふことが肝腎……」  
膝を叩いて共鳴▲翌朝になると、  
年賀廣告を申込まれ、そして「私  
のは特に寄稿家に敬意を表すとい  
ふこととして頂きたい。」



支那縱横記

奉 天 廣 江 澤 次 郎

◇

世界の謎、變轉極まりなき摩訶不思議の中華を机上調査や先輩知友の御高説拜聴位で輕卒に判斷を下したり企業を目論もうと思つたつてそれは大錯覺だ、茫漠たる支那を不可解な支那民族が不安定な政局上で左往右往、轉々變通して居るのだから判らぬのが當り前だ。

併し支那に對し優勝の地位を確保した國家が東洋の權威であり指導者となる事は叙説送もない。私共實業家も亦四億萬の民衆と無盡藏の富源を不可解の文字に葬り放任して置く事が出来ようか、私は先づ獨創の見解、透徹したる觀察眼を養はんと驚馬に鞭を懸けを求め事業にも身を投じて過去數年間支那各地を東奔西走、南船北馬走り廻つた、隨つて碌スツボ京城の吾家で一家團樂お正月など楽しんで事は稀だ、憤々深い母も愚痴を並べ妻もボツボツ不平を唱へ、小供達が淋しがるのも更々無理はない、之れ皆私が小乘に囚はれず大乘的に理想に向つて勇往邁進した罪だ私も新春を迎へて數へ年不惑を越す一つとなつた、今年からは家庭も顧み、シツクリした氣分で對支發展に努力を重ねよう。

大正五年の暮、私は滿洲から北清に入りお祭氣分の漲つたクリスマスの前日北京から漢口に向け出發した、漠々たる曠野を京漢列車に

一晝夜半身を托し、雪霰れの降りしきる廿六日の夕將來南北支那の重心點となる漢口——九省の會と其繁榮を謳はるゝ漢口に著いた、

瀾川總領事や同地操觚界の耆宿藤田大人等とのみ懇談し年末匆忙裡多くの知友を煩すに忍びず漢陽武昌もソコソコに襄陽丸の客となり楊子江を下航した、減水期の長江而も雪の降りしきる日もあつたので七十近い老船長寢食を忘れて下航に艱苦を嘗めた、老船長は英國人であるが罌鏡として壯者を凌ぎ元氣旺盛なものだ、運動を盛んにやり飲食物にも甚深の注意を拂ひピフテキの如き堅き物、紅茶の如き刺戟性の物等絶対攝取しない、老船長の長江生活約五十年の由、英國の牢乎たる對支勢力偶然でない事が首肯される、其點になると日本人は兎角功を急ぎ同志打に陥り氣短で不衛生で不用意で其上對支活躍に數十年の立遅れと來てるから根底が淺くグラつき易いのも當然である。

◇  
南京へ著たのは大晦日の朝だつた『ボーイさん荷物は明日上海の豐陽館へ届けて呉れ私は南京から汽車で上海に行くから』

と荷物の采領を船室附のボーイに頼み私は南京へ上陸した、泥濘の南京町を洋車で飛ばした、金陵の舊都も頽廢し今は偲ぶべくもないが私は海軍療病院前で大理石造の

『敬惜字爐』を發見した、文字を愛敬する支那人には紙屑たりとも文字を粗略にせば立身出世不可能と云ふ迷信がある、支那旅行すれば途上往々『敬惜字紙』等の紙屑籠を看受けるが大理石造の三尺角高サ五尺に及ぶ字爐には驚いた。對岸浦口を覗き午後二時南京發滬寧鐵道の客となり中部支那特有の風光に迎へられつ送られつ晚九時頃上海に著いた。

◇

一人旅の呑氣さ、荷物の無い身の輕さ、徐夜の上海の光景を觀て宿に行かうと譯から其まゝ散歩と出懸けた、良家の子女も店舗の丁稚も嬉々として街路を右往左往する何處來ても上海の股賑繁盛は又格別だと人波に陶醉して歩く程に行く程にスツカリ方角を取違へ共同租界を抜けて佛租界に行つた、英語も支那語もサツパリ駄目、一時と過ぎ二時も來た、少々焦燥せざるを得ぬ、支那宿へ飛込んで泊めろと談判したが荷物一つ持たぬ風來坊の私を泊めよう筈がない、漸やくの事筆談で用を辯じ洋車を雇ひ午前四時頃豐陽館に辿り著いた、追が大晦日の晚否元旦の拂曉だ、豐陽館の番頭も女中もマダ松飾やお鏡餅の飾着けに忙しく私が事情を話せば皆な腹を抱へて大笑ひ早速部屋に案内された、綿の如く疲れグツスリト眠し覺むれば元旦の朝暾は昔浦口の濁流に映じ附近の日本總領事館の日章旗は一層鮮かに見えて嬉し。

◇

翌大正七年の元旦は大坂よりの歸途釜山入港の櫻丸船上屋敷と雜煮を頂戴仕り其晚京城へ著いた。一家團樂打寛いだお正月は格別！一年の勞苦を充分慰するに足る。

# 亦樂

京城日報社 河谷 靜夫

(三三)

私は去年の九月即ち二學期の初めから朝鮮人の小供を一人預つて之れを南大門小學校の三年生に入れて正式の教育を受けしめて居る一方、私自ら大膽にも且暮其教養に任じて居る。

兒童の名は朴鍾萬と云つて、今年十一歳である、就學の前年から内地に預けられてあつたので内地で三年の一學期を了へたまま、私が引き取つたのである、淀みない國語に引き替へて其朝鮮語は全然駄目である、兒童の親は朴象基君と云つて全北扶安の富豪で同君も内地で正式の修學をしたものである、兒童鍾萬を私とに看ることになつたのは、私が全北の土に親しんで居た三年中に朴象基君から聊か私の人となりに惚れられて居つたと云ふに因する——多少のお惚けもある、私が此事で府の澤村さんや南大門學校の河野さんやを訪ねて相談する迄には妙からぬ苦慮研究を費した後であつた、家庭的にも可なりな討究を試みた、崇高な而して眞剣であるべき人の子の教養と云ふ大事業を單に私一個の興味本位からの決定では如何かと頗る躊躇したものである。然し私は遂に猛然として決心した即ち敢て嚴父朴君の寄托に酬ひ、せめて此兒童の初學教育終了迄を學校側と二分して其一半の責務を引受ける事とした、但し此決心の内には眞

の撫育、心からの愛護が、必ずや此兒童の心を動かして眞の幸福なる帝國の一忠良たる素地を完成し得るものとの自惚れと、此兒童を通して深刻に朝鮮及び朝鮮人を研究して見たいと云ふ小さなアンビションを含んで居たと云ふ事は事實である。

私に一男一女がある十六と十三である、鍾萬は此兩兄を兄さんと云ひ姉さんと呼んで喜戯し勉強する兄妹は鍾萬々と云つて愛撫する私等夫妻には小父さん小母さんと云つて懐いてゐる、秋晴れの日曜など兄を強請んで、動物園行を斷行せしめ辨當袋が破れたと云つては姉に補綴を求めて居る、一切の配分は公平であり、あらゆる機會は均等である、片手落たとか、不平だとかの怨聲は動もすれば宅の兩兒から起るのである、色んな買物の要求の如きは、老の子供たちからよりは鍾萬から起る場合が遙に多い。

私に對してする小供等の挨拶でも特に鍾萬の夫れに對してはハッキリ先方に通するまでの應答を返して居る、彼の成績物に評點甲のあつた場合皆んなで之を稱へて居る彼の誕生日には其級友中の親善者を招いて終日の歡を盡さして居る彼の環境は一切無差別である、至公至平である、そして特に面白い事は、大將頗る我『さむらい』に

趣味を持つて居る事である『さむらい』を要素にしたストーリー物など夜の更くるも知らず熱心に聴いて居る、音響機でも浪花節や琵琶歌を好愛する、之れは嚴父朴君が『幼年時代から日本魂を注入した』と云ふ理想に基くものか内地生ひ立ちの四年に其源を發したのか、何れにしても其好愛の程度が普通の小供以上である、唯最も憂へて居る所は吾々が家を擧げて愛護して居る事が、不知々々溺愛となり、従つて増長となり、究竟取り返し難い放漫となつては、大變であると云ふ事である、然し家族の一員とした當初叱吒嚴戒を加へ其當然の結果として、委靡退墮而して偏狹執拗に導くの怖しさを思へば、尙或る程度の溺愛を可としたい、而して此の兒童の性情の何處かに憂ふべき、誤れる一二の缺點もある、又内地人兒童或は其環境にも慥かに遺憾な點がある、宅に來た當初數日は好んで外出し

## ◆山

工藤ゆり子

山に立てば地上の我とおもほへずうつし世のさま目の下に見て

他の兒童と喜戯して居たが、其後急變して靜居主義となり、足一歩も外に出ない事になつた様である、どうも何處かで誰にか侮辱を受けたもの、様である、——本人は頭として言はない、此一事は妙からず私の心を暗くした。内地での四年間では山に川に常に餓鬼軍一方の雄であつたものが、朝鮮に還つて却つて或種の差別を受ける實際に遭遇して小さい頭腦が如何動く

であらう、此事に就ては校長の河野さんや受持ちの井浦さんには特に心配を掛け其細心の御注意を得つゝある、由來内地に居る内地人と朝鮮に住む内地人が、どうも朝鮮人に對する考へや取扱ひを異にしてる様である、内地では數多い内地人の中に僅かな鮮人で、從つ

導くもの愛護するものとなり朝鮮では數多い鮮人中間として澤山な缺點を見せつけられ、爲めに内地人中何時とはなしに朝鮮人に對して別箇の考へや扱ひをする人が出て來るのではあるまいか、我鐘萬の籠居主義に改變したのは或は此間の一縮圖を示すものではある

まいか。即ち私が尠くとも或期間瀾變主義で進まうと考へてる所以である、私は茲に回陽と共に更に新なる、勇氣と興味とを以て私の副業としては餘りに偉大なる此崇高至純なる大事業完成の道程を辿らんとすものである。

詩學古事抄錄

古城梅溪

獨醒(又濯纓)

屈平字は原、曰く世を擧げて皆濁れり而して我獨り清めり衆人皆醉へり我れ獨り醒めたり是を以て放たれたり、又歌つて曰く滄浪の水清らば以て我纓を濯ふ可し(楚辭に見ゆ)。

眼看人盡碎何忍獨爲醒(王績)、睡入本獨醒(邦才)、清時有獨醒(干鱗)、我來吟澤畔不是獨爲醒(同)、日對春湖色潏潏濯纓(同)、滄浪清若許聊可濯吾纓(同)、從此三江上悠悠好濯纓(同)、憔悴風塵獨醒(世貞)、聽歌想濯纓(楊士奇)、控船應漁父同唱滄浪吟(常建)、君同漁人意滄浪自有歌(長卿)、塵土斯可濯胡爲語滄浪(德輿)、濯纓良在茲(浩然)、滄浪吾有曲寄入濯歌聲(李白)、滄浪浩歌起身世羨漁翁(景

明)。

灌園

子貢漢陰に至り丈人の甕を抱き井を汲んで園に灌ぐを見て問ふ、何ぞ桔槔を作らざる乎、丈人笑ふて曰く吾れ聞く聖人云く機事あるものは必ず機心あり機事あるものは必ず械心ありと吾れ知らざるに非らず蓋じて爲さざる也(莊子) 逸士漢陰園(光義)、自愧無此容歸從漢陰老(同)、寂寞於陵子桔槔方灌園(王維)、隣有灌園期(干鱗)、不學於陵哭桔槔恒晏如(同)、鸚鵡群隨抱甕閑(明卿)、永息漢陰機(宋璟)、頗識灌園意於陵不自輕(同)、灌園只識無機心(錢心)

卞和(又連城)

楚の卞和玉璞を厲王及び武王に獻ず、二王玉人をして

之を相せしむ、石なりと言ふ、王和を以て詐りと爲して而して左右の足を削す、

文王位に即いて和乃ち璞を抱いて而して楚山の下に哭す、王人をして問はしむ、

和曰く吾れ則を懇むに非らざる也、夫の憲王にして而して題するに石を以てし貞士にして而して之に名づくるに詐りを以てする也と、

王乃ち玉人をして其璞を理めしむ而して玉を獲たり官遂に命するに和氏の璧と云ふ(韓非子)——趙和氏が璧を得、秦之を聞き書を遣つて曰く願くは十五城を連ねて璧に易へん、是に於て趙に蘭相如をして之を贈らしむ(史記)

荆和當路泣良璞爲誰明(高叔嗣)、何人泣抱陵陽石(世貞)、和璧蒼蠅之不染(同)、甘嬰楚荆明投璧(中行)、響起兼城和氏璧(同)、抱璧何須喚拜候(同)

雙璧千秋重入趙共看明月照連城(同) 卞生懷楚玉(景明)、連城爲寶重(同)、

風塵是處陵陽淚(明卿)、連城高一抱(干鱗)、明月堪償十五城(同)。

財 界 時 論

支拂日の統一

と貨幣の節約

朝鮮勸業信託  
事務取締役

平井熊三郎

〔二四〕

然らば民衆的支拂日の統一に依りて市民各社會の享受する利益如何と云ふに、例へば其支拂期日を三十日に特定したりとせよ、俸給生活者は俸給日より三十日迄銀行に預金して其利子を獲得し、而も商人は懸取に使用する店員を節約し得べく、一般市民も亦一齊に三十日を期して決済期日とする結果は其取引銀行を介して支拂を完了することとなり時間の經濟を如實に具現化するのみならず、保管上の危険を免れ且つ零碎ながら金利の増收となりて國家民人を利する結果となるので、一舉兩得否三得にも四得にもなり、而も相互決済に銀行を利用する爲め貨幣の節約を爲す結果を生じ國家經濟上其効果の偉大なることは識者を俟ちて論ず可き問題でない。

斯くの如き極めて平凡な事象に對し而も實行上の可能性を十二分に備へた事柄を何故社會は等閑視して顧みなかつたのであるうか、要

◇ 論

松寺桂陵

送りこし品は見えねどおのづから籠をもる香に松茸と知る

之事態其ものは極めて平凡であり事小なるが如しと雖も、之れを單に一の京城のみでなく全國的に普及したならば國家及民人が享受すべき利益は決して尠少でないのである、今や政府は行財政理を斷行して國民生活の基礎を改造すべく努力せる時、大正十四年を期して民衆的支拂日を統一し貨幣の節約を圖るは國家政策上の見地より極めて重大問題であらうと思ふ、吾人は社會改造の現代に直面し敢て斯言を呈し識者の指教を仰ぎたいと思ふのである。

前號に於て朝鮮統治上の歴史的觀察と批判に就いて寄稿した余の原稿は其筋の忌諱に觸れ遂に没書になつたそうだ、然し余の實際の眞意は總督政治にケチを附けようと云ふ様な大それた考は毛頭なかつたのであつて、それが其筋の忌諱に觸れたとすれば筆の勢が目標を外れたのであつて余の不徳の然らしむる所と云はねばならぬ、それで今回は新年早々其の筋の御賢慮を煩はすやうな事があつては縁起でもないと思つて方面を換へ極めて卑近な標題を掲げてお茶を濁すこととした。

日本古來の商取引上の慣習は、正月の二回を以て決済期とした、それが時代の推移に伴ふて大晦日所謂二ヶ月に一回となり、現在では一ヶ月一回の月末勘定と云ふ事に短縮されたのである。

然るに此月末決済と云ふ事が茫漠として統一されたる一定期日の特定慣習がない爲め商人對華客の決済日は官吏其他の俸給生活者は二十一日乃至二十二日又は二十五日月末或は翌月五日等決済期日は區々に別れ、隨つて商人間の取引決

濟期日亦頗る繁雜であることは吾人の文化生活を裏切り之れが決済に關する時間を浪費するのみならず、社會政策上又は經濟上の損失は決して寡少でないのである、茲に於てか此缺陷を補ひ商取引の圓滑と運用上の相互利益を助成すべく統一せる民衆支拂期日の特定慣習を設定する必要を感じるのである、殊に我が朝鮮は新開の殖民地であるため、人心の弛緩を表徴せる一大缺陷とも云ふべきか此支拂期日が頗る複雑にして之れが爲めに商取引上の支障を誘致せる事は社會政策上看過す可からざる問題にして、支拂慣習の改造は焦眉の急に逼れることを痛感せずには居られない。

此の問題は平凡過ぎる程平凡な問題であつて議論の價値すらないのであるが、識者が常に時間の經濟と實益上の不便を感じ支拂期日の統一を唱道せるに拘らず之れが實現を觀ざるは實行上の可能性を有しないかと云ふに決して然らず、健忘症に罹れる社會は痛切に其の必要を感じないから之れが實行を疎外して顧みない結果に依るのである。

我 田 引 水

木戸齒科醫院 木 戸 虎 藏

牛

甲「總て蹄の割れた動物は足が早いものだ」

乙「然らば牛は？」  
甲「牛は偶蹄であるからこそあれ位に歩けるんであつて若し馬の如く單蹄であればおそらく蝸牛の歩みの如きものであらう」

反煙草黨

「恐る可きニコチン！一本の葉巻から採れるニコチンはよく數頭の兎を殺す事が出来る、數本分のニコチンは一人を殺すに十分である、それ程に猛毒なものを愛煙家は朝に夕に四六時中平氣で口にして居るのである、無智と言はむか無謀と評せむか其言葉を知らない」云々と煙草の呼吸器を初め神經系其他人體に及ぼす害作用に就いて述ぶる事數千言。

國民が一ケ年に煙にしてしまふ金額及直接間接に喫煙の爲めに起る——火災等の損害を統計に就て示して

「若し彼等が之を廢するとすればこの巨大な金額は個人延いては國家の利益となるものであつて之れが便途を社會的國家的に有意義な方面に求めたならば増進される吾人の幸福は幾何であらう？、一考する要もない事と思ふのに禁煙論者の聲は何故にこゝろ小さいのであ

らうか悲しまざるを得ない」

「彼等は慰安だとか嗜好だとか種々な理屈を並べて有難かつて居るがそれは要するに惡習慣を打破する勇氣のない意氣地なきを銜ふ言葉に過ぎないのである、元來煙草は阿片又は酒類等と共に太古人智の發達しない時代に其如何なるものであるかを知らず只だ一時の快感を貪つた遺物に過ぎないのである、遠い祖先からの根強い習慣に過ぎないのである、考へて見ても生れ乍らにして煙草の好きな人が幾人あるだらうか？彼等の殆んど全部は幼少の頃生意氣に大人の眞似をして之を口にし幾度か眼をまはして洗禮を受けたのである」

「世の進歩は吾人の生活苦を増大する随つて慰安てふ事の必要も亦急になつて来る、乍併煙草の如き副作用の大きなものを敢て求めなければならぬ理由はない、他に無害なものがいくらでもある、吾人は一日も早く之が全廢される日を期しなければならぬ」。

煙草黨

「敢て人生觀を享樂第一的におけるといふ意味ではない、けれど好きなものは何もそう強て止めんでもよくはないだらうか、勿論煙草が人體に無害なものだとは言はないけれど、然し幾本目の煙草を吸ひ乍ら死んだと言ふ事は聞いた事が

ない、また禁煙家が皆んな立派な體魄を持つて居るとも見えない、左黨の多くは餅菓子の一ツか二ツで參つてしまふけれど、好きな人は五ツも十も平げてケロリとして居る様なもので人間の體といふものはそう窮屈なものぢやない、そうして見ると煙草の害をいふのも好きな人に應用しては少しくアテにならない學說になりはしないだらうか……最後に昔からの偉い人で煙草の好きな人と嫌ひな人とどちらが數が多かつたなんて段々鼻息が荒くなる——。

「食後の一服！休息時の一本！其味は煙草黨でなくちや話が出來ない、いら／＼とした感じは一本の煙草に依つて自ら和らいで来る、フンワリと消えて行く紫煙を眺めて居ると仙境に遊ぶの感を覺ゆる」  
「それでなくてもや／＼こしい世の中だ、一一むつかしい事ばかり言つて居ると頭が禿げて来る、壽命が縮まる、ニコチンの中毒はおそろしいかも知れないけれど、それよりも神經衰弱に罹らないよう用心する事も國家社會の幸福を増進せしめる所以だといふ事を忘れてはならない」。

◆志村氏の事

平 田 久 雄

東拓の志村さんが前號に看板文字の批評を書いた▲急所に中つて居るので到る處話タネになつて居る▲處で當の志村さん夙に小野鷺堂門下の高弟で、書道は三昧に入つて居る▲東京で女學校の教授をして居たこともある▲目下は奈良平安時代の假名を熱心に研究して居る▲珍らしい好學の士だ。

京城つれつれ草

殖産銀行 守屋三葉

を過ぎなば江岸一帯高樓參差、朱欄紅虹を欺き、猪牙館の江戸振りはなくも龍頭鷲首に絃歌溢るゝ趣はあるべし、陽春の水繁華の子縁波の裏に人影の揺動するを憶ふだに詩情は湧かずや。

ひねもす算盤に使用すれば閑かに筆とるいとまとてなけれど、昔より番頭のチョツキリ遊びは通り相場なり主の目を忍びつそこはかたなく書きつければ吾ながら怪しうこそ物狂ほしけれ。

京城に餘計なものは南山なり山に棲むものは山を見ず

ば世に暢達の趣なく井戸の中にはた牢獄の中のみある心地こそすれ、せめて其の半分も低かりせば差當り長江百里漢江のうねりを見るべくあはよくば渺々萬里大海を望むべし、盛夏海風を遮り猛冬嚴雪を宿せば其の罪櫻谷の夜櫻位にては價ひ難し。

南山の段々に三坪十坪をしつらひ住む人々には格別氣にかゝる業とも覺えず、さはれ都の北松眠洞あたりに住めばほんに目障りなるは南山なり、この年月芝居の文句ならねど『消えて失せやがれ』と願ひし事の幾たびぞや、實にや京城の北側に住ひするもの誰かはこの山を惜める、屏風の如く御立の如く我等の目路を限れ

京城の町につれなきは漢江なり、よき人の拗ねたるがごと漢江は京城を見捨て、冷やかに流るゝなり、清溪川など名前のみいと清らかなる流れはあれど、脚を洗ふにさへ足らぬを如何せん端唄の文句ならねど意見せらるゝ程戀しきは人情なりこの河洋々として街の眞中

京城の都市美は鮮銀前に鋪るとや言はん、鍾路に立ちたりとて四丁目に行めばとて未だ鮮銀前の如く得も言へぬ美感に打たるゝことなし、京城を偲ぶ人誰かはこゝを憶はざる、其の何の爲めなるやは分拆し難しと雖も鮮銀の建物が興ふる印象に負ふは否み難し据りよき建築の而かも裕に兩翼を張るところ聊かの威嚇を宿さず、却つて無量の慈愛と平和とを覺えしめずや、京城は大觀すべき都也、南山頂上の眺めなどこゝよなく目出度し、されど足一たび巷に入れば街路單調、陋屋櫛比遂に一株の美感をさへ興ふるものなし、萬金を投じたる建築なしとはあらず、繁華の巷に乏しにもあらず、

# 京 城 雜 筆

ず、唯美を爲さざるのみ、唯だ氣品高からざるのみ、實にや大京城は鳥の雛にもたとへん、長きあり短かきあり羽毛未だ整齊の美を成さずとや言はん、さはれ京城てふ大雛鳥は長じて平和の鳩たるべきか、將又精悍の鷹たるべきか、なほざりならぬは建築にこそあめれ

初秋の頃月明の夜、南窓によりて京の街々見はるかすも心行く業なり、蕩の波とうねる彼方に南山夢の如く淡きがよし、山腹のともしび九雲の星につらなるところかすかに砧の音す、月天心に至りて其の音一層牙ゆ誰か李白が『子夜吳歌』を吟じて一片の月萬戸の砧に懐郷の涙をしほらざる、砧は今日猶東北の山家にきくを得べしと雖も京城の砧は亦特有の情趣を有す、蓋し京城名物の一たるを失はじ

生は美しく、さはれ妓生の最も粹なるは人力車上に端然たる御姿なり、七三に或は半々に振り分けられたる髪の漆黒に櫛られたる氣品いと高し、すべて感興の中心は平安朝を偲ばしむるにあり、起つて簾を捲かしむべく坐して琴を彈ぜしむべし、三味線を持たしむべからず唄はしむべからず、況んや貫一、浪子の歌をや。廣きに似て狭きは京城なり大官の來る毎に珍客の去る毎に京城驛に集る人々大低は同じ顔觸れ也、歡迎會の席上に送別會の宴會に又四季折々の年中行事に相會するもの大方は陳腐なる御姿也、御互に何々議員、何々幹事、或は顧問相談役など延長十里に及はんす肩書を背負へども代り合つて別段代り榮もせぬは京城なる哉今日打合せ明日は會議、晝はホテルに晩は旗亭に、朝は御入城夕は御退城と一月が内半分は停車場に通ふ

に世に宴會と會議と停車場通ひの爲めに生くる心地こそすれ、醫者は馴れて髪よりも興なく仲居親しんで女中以上に心安し、夫々の顔役身分愈高くして益機械と化し、娛樂と趣味と自ら特權階級を成す、よしとも言はじ悪しとも言はじ。

京城の冬こそ面白けれ、雪は飛んで鷺毛に似たりなど呑氣な文句を吐けぬ程の寒さなれば大方は温突に籠りて武勇傳など讀むなり、三寒の日など三十女の長マント召したるいと痛快なり、丸鬘などピロッドの襟より秀つる亦妙なり、手柄の藤色などこよなく目出度し、『チゲ』君の水鼻を流せる醜突屋の鼻先眞黒に煤けたる、皆とりどりの眺めなり塵箱の片へに凍え泣く貧兒の聲は悲しく、そよりくる燒栗の香は甘し、氷れる道に女の歩み愈つゝましく顔赤らめつゝまろべる女御の御裾拂はせ給ふも風情也。

# 賀筵の歌

久原鐵業所  
京城事務所

小 瀧 元 司

〔二八〕  
を案出し之を唄はせ申譯の代りとする積りで意氣揚々——否酒氣紛々として出發しました。

## 賀筵の歌

あら玉の年を迎へて門松や軒の飾りの縮繩を解いて間もなき廿日の日神に契りの友どちと鶴の蹄を二つ三つ重ねて龜に劣らずと壽ほぎ祝ふ盃に松の緑りの風更けて操正しき吳竹の節面白ろき笛の音や三筋の糸の調子能く舞ふ姫だちのふり袖を互に競ふ紅の朝日のやかた輝きて綻ひ初めし初春の梅の香りに酔ひ歌ふけふのむしろぞ樂しかりける、けふの筵ぞ樂しかりける。

之れは鎮南浦の朝日館で開筵の目的で廿日著南早々土地の老妓に三味線に合はして呉れと頼みました。がこれも失敗に終りました。それは宴會に間に合はぬとの口實で断はられました。イヤハヤ酔中の歌作も無駄となり意氣揚々どころか意氣銷沈に終つたことがあります。呵々。

## ◆世間ばなし

平 田 莊 一

◆不二興業の藤井さん、世界語と題して一論を試みた(本誌所載)例に依つて堂々たるものだ、處が同稿は藤井さんがこの間平北へ旅行したその片田舎の石油ランプの下に、多夜のつれづれを書いたものでほんの突嗟の囁稿……但し同氏はいつも多忙なので原稿は大底汽車の中かさうした旅先の旅窓で書くんださうだ。

◆勸業信託の平井さん、夙に辯論の癖として名がある、ところが氏の長所は口舌ばかりでない原稿を

書くことも一瀉千里——大底本誌のなどは前日に頼んで置くと、翌朝は出来て居る、一箇快筆の士だ  
◆同じ勸信の藤尾さん、前號の石稿氏の『文鳥』を見て、僕も小鳥の趣味があるんだ、あれを見て何か書きたくなつた、キツト近いうち一文を寄せるよ——と、どうかお早いことに願ひます。  
◆朝鮮火災へ行つて見ると、夜の八時九時まで全員居残りで勉強して居る——それが十一月半ばからのことだ、ズイ分きついでせう能く社員がブツ／＼言ひませんねといふと、甲本さん、ニコリとして『そこが我が火災の社風です』

# 京 城 雜 筆

毎回各位のさまざまの御感想なり文章なりを拜見するの都度慚愧に堪へぬのは何も書くべき新しい種のない事、即ちそれだけ頭がぶるいのを感じるのです、嘗て某亭に官民十三の御仁を御招きせしに配膳の前に當時流行の『ゴルフ』の御話で持ち切りとなり却々盛んでしたが新聞や雜誌で能く見よする其の『ゴルフ』たるや如何にして勝敗を決するや一向に存せず隣席の富田翁を顧みて苦笑した事があります、又例の世界の娛樂界を風靡して居る支那の『麻雀』の如きは偶々林茂光さんの説明を讀んでもさつぱり頭に這入らず、更に可笑かつたのは九月の末に東上する時釜山在住の孫が坊は御土産は外の物はいらぬから『デルタ』だけを買つて来て呉れとの事でしたが、さあ其の『デルタ』が分らないイヤハヤ大弱りで娘の説明を受け歸りがけ大阪を探し廻りやつとの事で買つて來ました、こんなわけで十臺御話になりません、然るに酒の失敗ならば年が年中で古いものから新らしいもの、ざらにあり之を書き出せば随分大冊を爲す事と思ひます、兎角意思が薄弱で克己心に乏しくなんともはや面目がありません。

左の御話しも酒に縁がありますが正月氣分として御許しを願つて書いて見ませふ、是れも古い御話し



野崎眞三君の

# 性研究を讀んで

瀬戸病院長 瀬戸 潔

◇近來一種の流行であつた物好的性研究は稍下火になつたが、眞面目な科學的研究は相當に相變らず研究されて應用醫術にも即ち一般患者の治療にも忠實な醫師は可なり注意し出した——そしてそれが爲めに救はれる人も決して少くない。

◇然るに單なる物珍らしさから來た研究心——否輕い好奇心から來た注意では其研究の本體に觸るゝ事が出來ず上ツ調子に走つて了ふ人が多いし、又相當に研究して人々が少ないためか或は斯道の大家が素人を指導する親切氣が足りなかつた爲めか上述の通り普通の雜誌には其記事がメツキリ姿を隠した——然るに最近野崎君の所論を讀むと、素人としては可なり眞面目さを持つて研究されたらしく余は一讀非常に愉快に感じた。

◇故關外博士がスバル誌上にブイタセクスアールリスを發表して十數年を経るが、恐らく今でも一般の人には例へ専門的の外國語を日本語で書いたにしても解る人は極めて稀れであらう、處が性の研究に於ては此十數年間に於ける新しき發見なり假説なりが非常に澤山發表されて居るのだから餘りに一般の人がそれらの消息から離れ過ぎ遠ざかり過ぎて居る様に思はれるの

である、其の結果野崎君が注意した様に世人の全く案外と思ふ性的生活は一般家庭生活に又社交生活に幾多の悲喜劇として表はれるのは私の眼から見て餘りに多く餘りに悲しむべき事實として世間に訴へねばならぬのである。

◇野崎君の所謂質と量との差異が如何に多くの哀史を生じて居るかは日本許りではない、何處の國でもあつた事であらう、併し女が著しく壓迫を被むる處では此研究は重じられなかつたが、現今の如く女の權利も相當に認めねばならない事になると互に色々不平が起る、

## ◆せんべい話

吉田 莊 一

谷府尹は、十一月號に『月夜の巻符』といふのを書いた▲處である稿に就いては記者はだ、ぶまごづかされたものだ——といふのは約定の日に府廳に行くと『よし、今晚迄に書いてとく、ナニ間違ひはないよ』……そこで翌日府廳に行くと、府尹は昨夜内地へ出張、イヤ原稿なんぞ預つて居らぬ……と秘書の人の話▲サテは一杯喰はざれたなど、地團駄踏んで口惜しがつて居ると、その翌晚『ハイ府尹さんの原稿ですよ』と届いて來た▲

不満足が生ずる、其處に何故か？と云ふ疑問が起る、之が研究の基をなすのである。

◇勿論今日で全部が解決された問題でないのみならず却つて内紛の事などが研究されたので愈々面倒な問題になつて來たのであるけれど一部明になつた處もあり之れ迄變質者なりと考へたものか普通の人があつたり、健康なりと考へた人が治療を要するなどの事實も多くなつて來るから、或性學の泰斗などは青年男女に性的智識を興ふるのみならず幼年時代に即ち青春期發動期前に其一部を明に教へて健康な性生活に入らしむべきであり且つ又結婚すべき男女は常に其結婚當初に醫者に就て教を乞ふべきである之れ即ち野崎君の所謂哀史を最小限度に少なからしむるのであると、之に就ては僕は我田引水的でなくも非常に賛成するのみならず子供ある親の最も注意すべき點だと考へる、各論に至ては餘り長くなるから茲には書きかねる

何のこぢやいと内々調べて見ると、府尹とても多忙で、京城では筆とる暇もない、そこで連絡船に乗つたを幸ひ船の中で執筆したものと解つた▲斯うなると怒るところかドウも氣な毒なことをした『イヤ早速お禮に行かちや……』▲河内山火災『何か原稿を書くから俳句だけは請求するな……』といふ▲聞いて見ると『書生時代センベイ會といふのを開き、同好と駄句を並べて嬉しがつたことはあるがそれは二十年の昔、今は人の作は喜んで讀むが自分ではホントに作らない、だから僕をヤイ／＼せめるなよ……』

# 銀臺逸事

殖産銀行 森 悟 一

【三〇】

大守の囁きは依然として續く。

『……であるから、予はこの儘素知らぬ顔で著座するであらう。お身は如才なく、物皆冷えて候供膳取換え申すと、そこは夫れ當坐の口上よろしく其儘膳部を改められい』

穴賢、お主人公には内密々々と、莞爾として席を立たれた大守の一言には、蘇生の天樂其物の餘韻がしたであらう。

此時迄、滅入る様に色を失して一心に、聞耳立て、居た外臣の腦裡には、電火の如く、傍輩である臺所方の才種頭や、お吟味役の間の伸びた青白い顔の二三が、消えた

## ◆ 雁

池田 照子

青白き月影すめるこの宵を水音高く雁のおりくる

り、浮んだりして居た、それは丁度、皺腹を切るか乃至は、お改易の憂目を見るに、如何にも都合よく出来上つた人間の雛形を現實に突付けられた様に……。

×××××

翌日、龍の口の細川邸に伺候して候の近習にまで、この活命拜謝の言上方を懇願に及んで居る總代の辭令が面白い、如何にも當時の武士氣質を確如たらしめて居る。

銀臺遺事の記述に従へば、

『舉藩、ひそかに此事を開傳え難有き御芳情なりとて、ひたすら感涙に咽ひ申した、今にも不思議候ひなば、譜代相傳の主に一命を奉らんずる事は、言にも及ばず、夫れにさし續きては、物の用には立たずとも、此殿の御爲めにこそ、涯分を盡さめと誰々も申しあへりとぞいへる』

# 京 城 雜 筆

『尾籠ながら、暫時中座仕る』と會釋して、突如、當日唯一の正賓たる銀臺侯(細川重賢)は、其座に突立ち上つた。

大牢の滋味堆高き盛饌を前に、今し威容を正して廣蓋に手をかけた大守の禮儀作法としては、餘りに傍若無人の感がないでもない。

一座は啞然として、この天晴れのお客振りに睨入つたが、我執の強い殿様氣質の雰囲気は育ち上つた種族の一人として、この振舞は當時に於ては敢て珍らしくもない離れ業であつたのである。

江戸詰の銀臺侯には、二三入懇の侯伯があつた、折柄、當日の主人役は誰れであつたか、無論、記録には逸しては居るが、恐らく、一入別懇の間柄であつたと云はるゝ水府公か、然らずば藤野侯の二者其一を出でずであつたらう。

お客様のこの不意打に、椽面棒を振つたのは御主人ばかりではない未座の接伴役は『呀ッ』と云ふ間に、鞠躬如として一座を滑り出て其儘縁側に平伏して居る、申す迄もない大守の上厠に『御手水を參らう』とする、忠實なる御案内方である。

障子の外に突立つた銀臺侯は、散し松葉の床しい庭上に、一と亘り其涼しい眼を放つたが、次の瞬間には、膝下にひれ伏して居る外臣を、髻の上からマザクと俯瞰し

て居た。

果然、大守の腰は二つに折れた、其引締つた唇は、平蜘蛛の様に平太張つて居る接伴役の、冷たい小耳に寄せられたのである。

『實は用便でも何んでもない、少しお身に話がある……』

鷹揚な物腰だが、併し如何にも世話に碎けて居る、恐るゝ頭を擧げた接伴役の額上には、吉か、凶か、今更ながら不安の曇に、困惑の色を漂はして見えた。

内密話は詮索する迄もない、事實は凭うである、勿體らしく銀臺侯の前に据えられた、お膳の上の蓋の物、悉くが、本來空の無一物であつたのだ、寛容の大守も此善意の冷遇には、一時少なからず怪訝の眉を顰めたが、そこは有鑒に當時より『肥後の風凰』と迄、世に稱えられたる名君であるから、思案は早い、その儘、一議にも及ばず『尾籠ながらの中座』となつた次第である。

思い懸けない霹靂の一撃に、氣死せるが如く、拭き込んだまゝ、饒さながらの櫻縁に、軒々と面型を押し付けて居た接伴役は、この有り得べからざる一大怪事に、渾身の戦慄を感じつゝ、自身の耳を疑ひ入つて居たのである。

然るに、これが善後策としての銀臺侯の措置は、如何にも無造作に而も鮮やかなものであつた。

趣味の飼鳥

朝鮮勸業  
信託會社  
藤尾直勝

お正月のことであるから、天下國家を論ずる様な堅苦しいことや、營業上の算盤パチ付かせることなど、皆全部抜きにして、當り障りのない家庭趣味のことを少し書いて見よふ。趣味は人生の娯樂であり又慰安である、併し一口に趣味と言つても、その趣味の中には讀書あり、園藝あり、謠曲あり、其他玉突、ゴルフ、狩獵多様多種に別れて居るが、音樂の如きは別としてその趣味の多くは主人公本位の而も一方的のものばかりで家族的のものでない、私は常にそれを遺憾として居ると共に、家族的娯樂に缺けて居る點よりして、世の輿論方の不平不満に對し妙ならず同情して居るのである。

籠の鳥……と言ふても、近時社會の風教問題を惹起した、彼の俗悪な映畫を言ふのではない、趣味として飼ふ小鳥の事を申すのである『籠の鳥』と言ふ語は、一面自由と言ふことを意味して居るが、廣々とした野に、又は綠濃き森に或は靜かな流れに思ひのまゝ唄ひ望むまゝ遊び戯れて居る彼等を、假に食物に不自由を興へぬとしても狭い小さい籠に入れて置くのであるから、彼等はどんなにか嘆くことであらうと、思はれるかも知れないが、彼等が野山に於て屢々遭遇する危険、例へば暴風雨や強敵に襲はれるやうな危険から脱せしめてやれば、必ずこの境遇に充

分な安息と幸福を感じるのであるから、決してそれを恨みもしなければ、怒りも嘆きもしない、寧ろその幸福に満足して一層彼の優しい唄、奇麗な姿を動かしては、飼ふ私共を慰め樂まして呉れるのに相違ない、だから飼鳥は決して慘酷でもなければ、又道徳上面白くないとも言へないだろうと思ふ。飼鳥趣味の效能としては、岡田文學士の言はるゝ如く、朝起もその一つである、實際小鳥の五籠でも置けば、夜が明けるか明けない内に、愛らしい聲で朝歌の一齣を囀つて呉れるものもあれば、又飼主の心に突透るまで友呼び交はすものもある、それを枕に近く聞いては、分時も寢床に執著して居ら

歳之首めに

古田まき

玉はまき

初春のはつねの今日の玉はまき  
手にとるからにゆらぐ玉の緒  
右は大伴家持の歌である、さて玉  
帚とけどんなものかと云ふに、奈良正倉院に藏するものが二つある  
長さが二尺ほどで、柄は紫革で巻  
き、金紙を以てその上を緊結し、  
紫緑靑空黄茶白等諸色の小瑠璃玉  
を木に繋ぎ飾りしてある處から  
玉帚と名づけたのである、正倉  
院にあるものは天平寶字二年正月

れない、誰れしも可愛い小鳥の爲めに、何事を措てもその世話を先きにする氣になる、この朝の三十分、活動に入る前の三十分、これが飼鳥者でなくて味ふことの出来ない氣持よい時の経過である。

春に秋に小さき音樂家は、妙なる獨唱にはた又友との合唱に、我家の家族一同を樂しまして呉れる、一そして家族一同は嬉々として、子供に至るまでこれに引つけられて居るのだから、飼鳥は主人一人の樂みではなく、家族的趣味の一つとして、未だ経験して居られない諸君にお勧めをしたい、私は今現に赤鬚、駒鳥、鳥駒、大瑠璃、小瑠璃、小燕、黄鶯、纏眼兒、及び鶴鶴四羽を飼育して居るので、朝は可なり忙がしい、京城には素人愛鳥家も相當多い様子だから、月に一回位は好事家相會し『鳥の會』でも開いて、お互に自慢の愛鳥を持ち寄り、飼育上の天狗話やら、失敗談を交換するのも面白からうと思ふ。

三日の儀式に用ひたもので、歳の始めに皇后御親ら靈神を祭る支那の儀式にならばせ給うたものであらうとのことである。

山色連天

仰ぎ見る山の端霞みさながらに  
はてなき空につゞきけるかな  
年々にみどりいやまし鶏林の  
山もみ空につゞくかと思ゆ  
初 年

初日影輝きわたりおきな兒が  
君が代うたふ聲ものどけし  
失 題  
君知るや涙を袖につゞみつゝ  
ほゝえむ胸のその苦しさを

# 父と新聞

経路角田商會 川端三次郎

〔三三〕

イカラな新しき試みであつたに相違ない、知事公も後援の意味で府廳にて使用する野紙などの特命注文をして社の經濟を助けた。

チリン／＼京城雜筆社より電話ですと取次がれる度毎に何だか借金取に追ひ廻されて居る様な心持がして一日／＼と延ばしては來たが終に遁辭にも窮することなつた、併しそれからそれと出來て來る仕事に追はれて中々文債を果す事が出來ない、今夜も夜半氣にかけながら寢に就いたがどうした機か、ふと幼時の事を追想し記憶は彼れより此れへと繰り出され私の父が京都に於ける新聞紙の創始に關與して居つた事を想ひソレ／＼之は話題の一ツになるわいと俄かに布團を蹴上げ急に筆を執る氣になりました。

私は京都の生れで純粹の贅六です由來贅六は因循姑息だとして通つて居ります、然るに豈計らんや京都人中には非常に進取の氣に充ちた人があつて維新後文化施設には最も早く手を著けて居ります、之れには當路者の指導も大いに加はつて居るかも知れぬが二代目の知事で後に男爵を賜はつた櫃村正直氏は明治の初めに於て獨逸人ワグネル氏を聘し、アボテキー又は舍密局と稱してた化學試験所を起したり或ひはビブリオテキーと稱して圖書館を設けたり、職殿と名付けたる機械場を建てたり、其他盛んに學校を興し教育を奨励したりし

た、三代目の知事北垣國道氏の世にては琵琶湖疏水工事を起して水力電氣を得、日本で最初の電車と云ふものを見るに至つた、又電氣動力を使用して工業に利用したのも京都が實に日本最初の榮冠を擅にして居る、法學博士富井政章氏は榎村知事時代京都府より佛國に派遣せられた最初の法學留學生だ又現在大阪商業會議所の會頭たる稻畑勝太郎氏は同時に佛國へ遣はされた應用化學の留學生だつた。

さて私は明治五年生れだが其時既に京都に新聞紙が發行せられて居つた、其名は京都新聞と云ひ、木版摺の二枚折十數枚を綴ぢたる雜誌様のものだつた、無論日刊ではない、發行所は私の家の向ひ側に舊銀座即ち維新前の銀貨造幣局(今でも町名を金吹町と稱す)の跡で社長は南畫で有名な山本梅逸の息梅所氏、顧問には當時京都府の顧問であり後新島襄先生を援けて同志社の創立に盡力した山本覺馬先生あり、記者には南麿綱紀(後東京高等師範學校漢學教授たりし人)及び横井忠直(日清戰爭時代陸軍編輯たりし人)などの人あり、而して私の父も今で云へば營業局長と云ふべき格であつた、今日の新聞紙と比較したならば殆どお話しにならぬ程幼稚なものであつたけれども當時に於ては非常にハ

◇

當時市民は尙ほ悉く結髪して居つたが歐米諸國では皆散髪をして居る、結髪の如き舊弊は一日も早く打破せねばならぬと云ふので先づ新聞社の同人から其範を天下に示さんと社長始め給仕の末に至る迄散髪を實行して其ハイカラ振りを發揮した、且つ夫れ丈けにては足らず門の蔭に伏兵を置き來社する人々を捕へ強制的に髪を切つて仕舞つたものだ、中には歸宅して家内に申譯がないとて泣いた人もあつたそうです、殊に面白いのは長夫人迄が其墨なす髪を切り棄て散髪頭となつたことで忽ち世間の大評判となり、態々新聞社送見物に來た人があつた位です、併しなから大正の今日になつては外國を始め我國の女流にも、散髪者が多い、標だから山本夫人は五十年前を透

◆ 山

江頭 まつ子

安からぬ心地こそすれ何となく火をふく山のふもと路にして

察した先覺者だつたかも知れぬ(この山本夫人は前日本郵船會社重役岩永省一氏夫人の母)當時石油ランプが始めて輸入された、非常に明かると云ふので新聞社にて世人の展覽に供した、夫れは硝子製の五分心ランプだつたのです。

◇

當時東京には太政官日誌とて美濃紙半折木版摺の綴本が政府で發行されて居つたのが今日の官報です

明治十年西南戦争の當時、戦況の報告が記載され地雷火の爆發して人畜の高く空中に飛騰して居る状態が繪入になつて居つたのを記憶して居ります、民間には英人ブラックス氏發行の洋紙四百活版摺の小新聞がありました、山縣狂介氏から横村氏宛東京發行の新聞を其地へ賣つて呉れ其代り京都の新聞を東京にて世話してやらうとの手紙も来て居りました。

◇

京都新聞は其後大判日本紙活版一枚摺のものに進化しましたが印刷機版丈けは手に入つても活字を得る事が中々困難であり又非常に高價であつたが爲め終にやり切れないとなり、且山本氏の死去、南摩、横井氏等の東上等種々の原因にて廢刊の止むなきに至りましたのは非常に遺憾の事です。

◇

日出新聞や中外電報などの發行を見たのはズット後の事です、父は

城後京都日報と云ふものゝ創刊にも關與して居ましたが之れも永くは續きませんでした、要するに父は新聞事業には成功の方では無かつたが兎に角明治の初期に於て我國に未だ新聞紙の多くなかつた時代而かも京都の様な處にてかゝる事業に手を染めた功勞丈けは認めやうなと思ひます。

夜明けが近くなりました、大分

眠むい、彼是百行位になつた線だからこゝで擱筆さして下さい

月 百 首

李王藏 末松熊彦

關 月

人もなく不破の關屋の跡あれて

月のみ獨り住みなれにけり

路 月

ただひとり辿る荒野の野中路は

月を左手のともとたのみむ

驛 月

清き宵心安しとたび人も

うまやの月に夜道行く見ゆ

坂 月

坂下に月を待つより鈴鹿山

ふり出でよこそ見るべかりけれ

杜 月

生ひ茂る杜の小路なか／＼に

月のさす夜は小暗くもなし

林 月

吹く風の竹の林にみだれつゝ

葉ことの露の月ぞくだくる

朝 鮮 行

長府 福原榮太郎

水 原

月と日の對座して秋の日の暮るゝ

通 川

秋日和露屋の上の朴子かな

海 金 剛(立岩)

瀟岩を終日なぶる秋日和

外 金 剛(九龍淵)

此淵の底に龍すむ紅葉哉

同(寒霞溪)

奇峰怪岩紅葉に酔へる寒霞溪

同(萬物相)

紅葉萬樹包む一萬二千峰

内 金 剛(正陽寺)

奉納の額を紀念に擲の秋

長 安 寺(時に山火事あり)

時雨るゝや金剛山は燒けるまゝ

摩 訶 衍

しぐるゝや朝鮮宿に骨休め

牛 兄

京畿道廳

時 實 秋 穗

じり／＼と焼付く様な夏の日、尻の邊糞まみれで喘ぎ／＼車を牽いて居る態を見ると、如何にも見ずばらしいが、さて廣々とした野原に悠々と草を喰むで居る其の様子、又泰然と打臥して芻を反して居る様は、如何にも偉大且長者の面影が見える、殊に牡牛の骨格逞ましいのが氣持がよい、平安朝時代に牛車を用ゐたのは、自動車全盛の今日から見れば、勿論時代後れに違ないが、あの悠然と都大路を練廻つた趣は、臭い烟を立てつゝ疾走する怪物より慥に詩的であらう、方丈記の著者は、福原遷都後の光景を見て、人の心皆改まりて馬鞍をのみ重くし、牛車を用とする人なしと歎いて居る、趣味の上からはさう見えたであらう、又牧童を載せ夕日を浴びて、歸つて行く野路の景色は、詩人ならぬ人にも一顧の情を變る場面である、それこれ何れも我牛兄が畫圖中の立物であるのは云ふ迄もないこと、牛兄は偉大でもあるが、又大に詩的情趣に富むで居ると思ふ。

子の歳で表はされて居る鼠は、如何にも敏捷快活な氣分の持主で、之も面白い、然し其の後に出来来る牛兄の悠然たり堂々たり又泰然とした有様は、慥に前者の才入らしきに對して長者の風を偲はせる所があつて、新しい年の或物を暗示するかの様と思はれる、人間の心を意馬心猿と云ふて、馬の如く猿の様に活潑々地、そして境に應じて移り易いものとするのは普通のことであるが、禪家では心を牛に譬へることが少くない、十牛の圖が悟道の經過を説明した面白いものであるのは云ふ迄もなく、牛窓欄を過ぎての一則是向上の關捩子、學人の苦心する所である、之は意馬心猿も心の一面であるが、眞實其の本體に至つては、我牛兄の物に動ぜず、而かも大機用を具して居るのに似て居る所から考へられたことかと思ふ斯うなると、牛兄も大に哲學的になり禪的になつて、尋常一般の俗物ではなくなるのである。

鶏口牛後と云ふことは、我々が子供の時から度々聞かされた言葉である、云ふ迄もなく鶏口がよくて、牛後が悪いのであつて、當世の人は皆此の方針の下に動いて居る、之も悪くはあるまい、然し牛兄に因むだ牛後あまり見榮のせぬ様子で、からだの蝸など逐ひながら、不平も云はずに動いて居る、其の態度は決して捨てたものではない、或意味からは、當節斯様に人の底積（底積）に甘むする大人物のないのは遺憾であるとも云へる、牛兄必ずしも悲觀する必要はない、鶏と牛とは餘程縁が深いと見えて、又別の言葉に、鶏を割くに牛刀を以てすと云ふのがあつて、此の場合牛兄は髓に鶏子より上手の役を承つて居る、之も面白い、人間には此の位の氣概がなければならぬ、然し豫でもない人間が只の身學問で、之を自惚の材料にするのは片腹痛い、街氣と自惚とは當今青年の持病である、而かも此の言葉は兎角其の病氣を増長させる嫌がある、此の點から云へば牛兄甚だ心得がよくない議論は兎も角、斯様に考へると、我牛兄は又大に道徳的軍大な意義を有つて居る何うかよりよい方面に其の使命を果す様、努めて貰ひたいと思ふ。

朝鮮が内地に對して氣を吐いて居るものの中で、牛兄は髓に其の重なる一人である一ヶ年何千頭の朝鮮牛兄が赤い毛色を其の儘に内地に渡航して、内地をして牛の赤化を恐れしめて居る、尤もそれは思想の赤化と違ひ、牛兄は其の持前の偉大性を發揮して、堂々内地の開發に努力して居るのであるから、髓に國益の親玉として尊敬せらるべきものである、最近の郡守會議の席上で、某郡守が郡の畜産組合で買ふ種牡牛を南鮮から買ふことは出来ぬか、それは江原道地方の牛は言葉が分らぬので困るからと云ふことであつた、牛兄の言葉と聞いてちと不審に思ふた、よく聞いて見ると、朝鮮では牛を使ふ爲め言葉が餘程多い、地方々々で其の言葉が違ふ、江原道地方の牛を買ふて來ると、其の言葉が通ぜぬので困ると云ふのである、それでもより以上離れた内地では、言葉の問題は聞かぬがと反問し、調べると、内地では牛を使ふのは重に言葉でなくて細である、朝鮮は反對に綱によらず言葉による、随つて言葉が多い、内地では言葉を使はぬから問題にならぬと云ふことである、成程總督府で牛の語を集めたものは一冊の辭典になつて居る（餘り大きくはないが）、之でよく解つたのである、人情風俗の違ふ上に言葉の分らぬ内地で活動して居る牛兄の勞苦蓋し多とするに足る、或種の人間以上と云へる、斯うなると牛兄の國家貢獻も亦偉大なる哉である。

新に丑の歳を迎へて牛兄を禮讚すること、之亦牛に因むで件の如しと云爾。

天 風 先 生

京 城 府 廳 谷 多 喜 磨

【三六】

大日本主義の鼓吹者、靈界の巨人何々統一哲學會主中村天風先生と書き出すと如何にも「驚胸に垂れ、或は總髮を紫の紐でも結んで居る人の様な氣がするが會つて見れば一個蕭洒たる角刈の快男子紋付の著物と同じ羽織を著込んだ所は上品な浪花節語りか強くない擊劍の先生とでも値踏みさうに見える。一瞥した時光のある生々した眼、底力のある錆びた聲とは私にも非常な好感を與へて一見舊知のやうな氣がした『あなたの聲は生れつきそんな聲ですか演説で練つたんですか』と問ふた『エー演説もだが氣合でせうね』と云ふ答だつた、之が天風氏と私の初対面の時であつた、紹介者は熱血男子の寺尾猛三郎氏であつた、同君は『僕は天風先生に服従はせない』と云つてたが實際は大分參つてるやうな風であつた、或意味での頑固黨の旗頭大村百蔵氏も大分の信仰者らしい、此の兩氏を虜にしただけでも天風氏は偉いと思つた、天風氏の道場には或高貴の方々が修道の工夫を積み給ふと拜承する、知名の士、天下の富豪雲の如く入門氏の教を仰いで居ると云ふ事などを聞くと今様由比正雪を聯想するが氏はそんな山師や野心家らしくもない寧ろ赤裸々な言動を恣にし自由の天地を翱翔する天才詩人的の肌合がある様に思は

る、其の説く所は靈力の發輝、不治の難病も之を癒すこと猶神の如きものありと謂ふ、京城でも所々で講演を遣つた、私は不幸にして其の一端を聞いただけである、弓削幸太郎氏は熱心な聽講者の一人であつたらしい、同氏は『全部賛成す』と裏書して居られる、大に共鳴する所があつたらしい、靈力發現の一端と云ふ譯であらう、時に實驗をも行つた、私も其の席に在つたが、蠟燭の火を喰つたり鶏を自由にしたたり利刃の上に人を立たしたりした、私も其の二三を試みた一人であるが天風氏の靈力が果して名刀村正の殺氣を奪ふたか、將た又あゝ云ふ遣り方をすれば元來村正の名刀も血に飽く慾を遣ふることが出来ないのか、青道心の私には判りやうがない、併し元來人間には潜在力と云ふものは肉體にも精神にもあることは否定出来ないものと思ふ、火事の際に大臼を輕々と持ち出した女があり夢遊病者が昔江戸と日光とを一夜の中に往復したりしたと云ふ話が眞正でありとすれば人間は非常な時には非常な力が出るものと思はれる、非常な時でなくとも修業に依つては非常な力が出る、庭前の雀の羽根を手裏劍で縫ふた古武士もあつた、百歩を隔てゝ強弓の矢を斬り拂ふ宮本武藏の早業も修業の効果であらう、行ひ澄まし

た道士には一ヶ月位斷食しても平氣なものがある、私でも五日間斷食したが役所には平常のやうに出て居つた事がある、地震や火事で一週間も食事に有り付かないと餓鬼の様になつて恐怖と飢餓との爲に死ぬる者もある、平々凡々の人でも心を靜かに恐怖心を去つて自若として居れば一週間の斷食位は平氣なものであると思ふ、印度の『ヨーガ』の哲學とか天風氏が遇つたと云ふ仙術を修めた道士がどんな者かは知らないが、天風氏が醫學と哲學とを色々研究をして一ツの理論を組立て且又修業に依て靈力の光を輝さん事に努めて居る事は事實であらう、火を喰ふたり針を腕に刺したり双渡りをやるやうな事は天風氏としては抑々未技であらう、弓削氏の發意で天風氏も今後公開の席上では之を演らないと云つて居た位である、天風氏が神か人かまだ私には判斷がつかない、蓋し私は天風氏の眞情流露した性格の一方面のみを見て

◆ 雜

工 藤 ゆ り 子

夜をこめて荒海わたる鷹金のつどかなかれと照す月かも

未だ幽遠深奥なる哲理を聽かず、神變不可思議の靈力の後光を拜する機會を得るに至らなかつた爲めであらう、只だ仙人とか道士とかの中には色々の手段を以て自己を扮飾しやうとする者が多い、天風氏は全く反對の行き方で總てを開ツ放して居る、茲に氏の生命があるではなからうか、此の開つ放した所が仙人とも神様ともなる入口ではあるまいか。



動を恣にし自由の天地を翱翔する  
天才詩人的の肌合がある様に思は

の矢を斬り拂ふ宮本武蔵の早業も  
修業の効果であらう、行ひ澄まし

た所が仙人とも神様ともなる入口  
ではあるまいか。

## 策 碁 の 話

京城日報社 河西 青 苔

碁といふものは妙なものである。  
わけもなく夢中になるから妙な  
のである。――

勝負に拘泥して夢中になるといふ  
のではない。對手の置いて行く一  
石毎に妙に引摺られて、利害得失  
も眼中になく、妙だ妙だといひな  
がら、息も繼がずに置き續けねば  
気が済まぬから妙なものである。  
一段落ついて偕て盤面を眺めると  
何時の間にか、思ひもかけぬ自分  
の石がすつかり袋の鼠になつて居  
たり、敵の石がコロリと死んで居  
たりする。

川柳や落語が好んで碁打を拉して  
来るのは、恠ふした境地を面白い  
と見るからであらう。岡目八目、  
傍から見て居れば随分馬鹿らしく  
もあり噴飯にも價するだらうが、  
當事者になつて見ると決してそん  
な生優しいものではない。置かれ  
て行く一石毎に一々敵の氣が遷移  
つて居るやうに思はれ、何葉何葉  
と随つて行くのも畢竟するに全人  
格の闘争だと思へばこそである。  
前も周囲も一切見えぬ盲目打ちの  
手輩こそ、却つて油汗の凝結だと  
思つて貰はねば引合はない。  
とはいふものの、此の程度の水準  
から脱出し得ない間は、到底もの  
に成らぬだらう位のこと秘かに  
考へて居る。考へては居るが偕、  
思ふに任せないのが碁である。

京城日報社には此の思ふに任せぬ  
手輩が澤山居る。最も甚しい處で  
繪語部の多田毅三さん、前の京城  
府水道課長秋田金治氏の令息で編  
輯部に居る秋田藤太郎さん、龍山  
將軍秋山照瀨さん、社會部の伊集  
院兼雄さん、政治部では私と内門  
勇さん、經濟部で小宮山元四郎さ  
ん、中村定次郎さんといった先づ  
顔觸である。

少しづつ思ふに任せたり任せなか  
つたりする處では副社長の泥谷良  
次郎さんを筆頭に、政治部長の高  
須賀虎夫さん、編輯の北川一さん  
營業へ行つて局長の河谷静夫さん  
に武間卓一さんといふ手輩。

思ふに任せぬよりも任せることの  
方が兎に角多からうと思はれる處  
で、社會部長の寺田壽夫さん、地  
方編輯の長閑光雲さん。

ザツと數へて十數名の碁客が揃つ  
て居るといひたい處だが、偕是を  
世間に押出したら打てるものやら  
打てぬものやら、寺田長間さん級  
で田舎初段に先づ四五目といふ處  
であらうか、いやいや五六目は置  
かねばなるまい。六七目なら勝負  
になるかも知れない。

その寺田長間さん級に對して、思  
ふに任せぬ手輩は大抵平時に於て  
六七目、イザ碁會などになると七  
八目は打たれやう。是では甚だ心  
許ないと評すべきであらう。

心許ないと思ふが、然し今や京  
城日報社に於ける碁熱は頗る高潮  
に達して居る。毎日三時四時頃、  
手の空いた者から次ぎ次ぎに地下  
室の宿直部屋へ下りて行く、そし  
て六時七時まで打續ける。毎晩遅  
くなるので「又おこられる、又お  
こられる」と呟やき乍ら、誰か痺  
れを切らせて立つ迄は矢張り打續  
ける。誰におこられるか、それは  
想像して戴きたい、兎に角おこら  
れることを苦に病み乍ら油汗を流  
して盲目打ちをやつて居るのであ  
るから、碁も並大抵ではない。時  
々何のために打つて居るのか判ら  
なくなることがある。思はぬ石を  
何時の間にかコロリと奪られた時  
などには殊に此の感が深い。

何とやら何とやらして又石がコ  
ロリと死んで秋の風吹く  
といった感じである。同情して戴  
きたいものである。

### ◆ 雜筆の表紙

平田 久 雄

三井の天野さんなど強硬な雜筆表  
紙改良論者があるので、さうく  
御覽のやうなものに變へた▲これ  
は京取中村さんの執筆で、歳末多  
忙な中を繰合せて筆を執られたも  
のである▲原圖は漢代の古瓦であ  
る▲朝鮮のものをと心がけ、李王  
職から扶餘、慶州時代の古瓦の石  
刷も貰つたがドウも思はしくない  
▲遂にこれに決めたわけである▲  
尙正月號は印刷を急ぐ關係で凸版  
刷にしたが、次號には中村氏自ら  
彫刻される筈▲中村さんに對して  
此に謹んで御禮申上げます。

公 天 隨 筆

中 村 天 風 師

寺 尾 組 寺 尾 猛 三 郎

〔三八〕

府尹の谷さんが天風師に關する稿を寄せられたそう、それは面白い俺も一ツ書いて見よう、澄江一月三舟共觀の感想も妙だらう、思ふに世間の馬鹿も多種多様だ、早呑込みの慌て馬鹿、識つたか振りの利口馬鹿、無暗に勿體ぶる體裁馬鹿、此種の馬鹿か天風師に對し遠くの方から批難したり冷評したりして居る、慌て馬鹿は師が何を説いて居るかも知らずに、此頃流行る自稱神様か何ぞの様に誤解して何だか難有味が薄いなど、誤説を並べる、某新聞にて會員から多額の金を捲上げて醫者の借金を拂つたとて鬼の首でも取つた様に尾に鰭を付けて書立てたもんだ、會費は嚴格な兒玉理事が取扱つてチヤンと收支決算を本部に報告し鑑一文も浪費などして居ない、第一其の餘裕がないのだ、天風師個人として醫者の借金を拂ふとも拂はんとも、其れが師の學説の價値に毫末の差も來さないことは餘りに明白だ、師は神様でもなければ佛様でもない、華胄の出にして然も頗る敷奇な運命に弄ばれ其半生は波瀾重疊人生の辛酸を嘗め盡したる人間味の豊かなる俗人だ、朝聞になつても飯が喰へる、講談師でも落語家でも、又演説家になつても世過ぎの出来る俗人だと俺は評

して居る位だ、幸か不幸か不治の疾を獲て生きんが爲漢撞きに漢撞きたる末、印度の大哲學者キヤーリアツパ師に邂逅し靈肉共に救はれて生涯の一轉機を劃し、茲に哲學と醫學を統一したる健康法の學説を確立し爾來東奔西走舌の爛るまで宣傳此れ勉むる快男兒だ、多情多恨熱血溢るゝ國士だと承知して貰いたい、二番目に控へた利口馬鹿も慌て馬鹿に似よつた連中だウン健康法か、など、知つたか振りをするが、心身共に疲れたる此國民の悲愴なる健康を如何にするやと云ふ大問題に當面してはサテ隣れむべし腹筒皆空だ、眞劍に考へて見たらどうだ、本氣に研究して見たらどうだ、看よ我等會員の多くは師に因つて幸ひに靈の力を識り又肉の病を醫されたのだ、俺れは諸君に告げたい、師は秘密の殿堂に隱身の術を行はないから何人も來つて其の殿堂に入れよ、師は靈力の發現に術惑の説を唱へないから何人も來つて其の正法に不思議なきことを知れよと、心身統一の學説は殊に根底堅くして枝葉繁茂せる如く、理路整然として撞著なく矛盾なく眞に天衣無縫の觀あり、哲學者來れ、科學者來れ、就中歡迎すべきは醫學者なり、然して徹底的に論難質疑を試みよ、

師の正々たる説明と、堂々たる應答とは諸君をして首肯せしむるに十分なり、若し夫れ體裁ぶる馬鹿に至つては蓋し最も濟度し難き難物なるべし、靈術の様なもの信ずると云ふことが何んだか非常識のやうだと、笑ふべし已れの非常識を棚に上げて體裁ぶつて居る、そんな會に加盟するのは迷信家だと、隣れむべし已れの消極的迷信家なることを忘れて居る、こんな下らぬ心理状態で折角得らるべき神聖なる健康法を知らずに醉生夢死するは、恰かも面當に首を縊つたり藁焼けで身投げをする連中と其愚相似たりと云ふべしだ、乞ふ試みに來つて師の説を聞け、師の説は至つて平易簡單言ふべく行ふべく諺に云ふコロンブスの卵に似て居るが、行へば必ず効驗があるのだ、最後に一言したいことは世人が餘りに醫師を過信し、萬病が悉く醫師に因つて癒るものと決めて居ることの誤れることだ、なる程最近吾國の醫術は世界に誇るべき進歩の域に達して居るのであるから十分に尊敬もし、信頼もしなければならぬが、其れには自から範圍が限られて居る、即ち病因が生理的に發生したるものは無論醫師の匙加減に待たねばならぬ、而し其れが心理的に病因があるとしたならば當然精神的療法に因らねばならぬのである、多くの場合精神的と物質的の兩方面より健康を圖ると云ふことが最も必要であると思ひます、嗚呼吾同志よ、寒心すべき帝國民の健康状態に注意せらるゝ吾同志よ、心身の健康を完くして自己及子孫の幸福を希圖せらるゝ吾同志よ、願くば前述の誤れる連中を濟度して吾同胞に普く福音を頒つ事に努力されん事を

しみと解つて來たやうに思はれ

世流きの出来る人だと俺は評

して徹底的に論難質疑を試みよ、

く福音を頒つ事に努力されん事を

# お正月

朝鮮銀行 岸 巖

◆いくつになつても私にはお正月が嬉しい。「チエツ、また正月が来るのか、うるさいこつた」といふやうな言葉をよく耳にしますが、私にはそんな感じの起きたためしがありません。尤も昔ながら免れたことのない私は、正月の前には必ずやつて来る暮れといふものには少からず當惑して、何とかして曆から大晦日といふ奴を放逐して、お正月だけを残す工風はないものかなどと考へたこともありましたが、それでも一夜明けて、襦衣と袴とを新しいのに代へ、剃りたての顔で、屠蘇の盃を手にした時は、ほんとにおめでたい気分一杯になります。

◆子供の頃には、何と云つても餅搗が一番うれしかつたやうに思われます。お正月でなくとも、蓬餅(私の郷里では五月の節句に拍餅の代りに蓬餅を作ります)おはぎ、お團子、など、季節々々でいろ／＼な餅が作られますけれどそれ等は大概一日か二日で無くなつてしまふのに、お正月の餅だけは如何にも大量生産で、見る間に臺所からお坐敷の方までも並べられ、其の頼もしい光景を見ただけで、もう寢床の中で唱歌でもうたひたい気分になります。——餅搗の朝は子供が起きて来ると却つて邪魔になるといふので、無理に寝かされて居るのです。お正月が過

ぎても、永い間天井には餅が一杯に吊られ、それが北國の雪の夜な／＼の楽しみになるのです。

◆高等學校の寄宿舎や下宿屋などで迎へたお正月は、矢張り淋しいものでした。冬休みで多くの學生は郷里へ歸つて行きますが、私達は郷里が遠くて、短い冬休みでは往復に日が潰れてしまうので居残るのです。がらんだりの寄宿舎や下宿屋で、それでもお雑煮を祝つて新聞の初刷を見る頃までは、晴れやかな気分ですが、やがて何事もなく午後になり、夜になつて行くのが、氣を重くさせました。殊に私などは、正月を楽しいものにしてきめて居るだけに、物足らなさを感ずることがひどかつた様です。たまたま保證人の内へかると呼ばれて、女學生と一緒に遊んだりした夜など、やがて電燈の暗い下宿の二階へ歸つて、貰つて来た密相をマントのポケットから出す時の淋しさは全く堪らない程でした。

◆さて、四十になつて、子供達の親になつた今日では餅が目當でなく、保證人のかたる會も目當でなく、酒もふだんだつて呑むのだから、敢て夫れがお正月の目當でもありませんが、正月その物が何となく嬉しいのです。子供の生長を喜ぶ心、無論そんな心持でもありませんが、子供と一緒に正月を迎ふる様になつて正月の味が初めて

しみ／＼解つて来たやうに思はれます。

◆お正月の門飾りに面白さを感じることが、無論子供の時からでしたが、此頃になつてそれが益々深くなつた様です。竹の輪、松の蕨根元をふつくらと廻る纏。それ等を疎らに包む眞白な雪。何といふ清楚な趣でしょう。東京では雪が稀なので、正月の松飾りに魂が入りませんが、京城に来て私達の様に雪國に生れた者には久しぶりでほんとうのお正月に會ふやうな氣が致します。單に飾りの上のみでなく、あの眞白な色で天地を包むことが、『新年の無我境』を作り出す重要な素因の一つではないでしょうか。我等の祖先はよくも新玉の祝ひを雪の時に定めてくれたものです。そう云へば、クリスマスストーリーにも雪がつきもの／＼です。

◆今度のお正月にも是非雪がふつてほしいですね。出来ることなら、除夜の鐘をつき初める頃から、音なくふり出して、初日の出の頃までに、すつかり霽れ上り、少し位目が痛くてもいいから、雪がキラ／＼と輝く元朝であつて欲しい。

## ◆ゴルフと碁

吉田 莊一

鮮銀飯泉氏と、同じ銀行のドクトル森平氏とは、ゴルフも圍碁も技術伯仲なので、頗る仲が善いが、或る一方がゴルフに負けるとその晩屹度相手を喚びにやる、そして御馳走に託してうんとウイスキーを飲ませて置いて、さて碁で仇討をするんだとはドコまでも茶目式をやる。

ゴルフ武者修業

恥晒しの記

朝鮮銀行 飯 泉 幹 太

[ 60 ]

はしがき

昔の武者修業と云へば大概強い者にきまつて居て、何處の道場に行つても負ける事がない。馬鹿に強い奴になると歸りがけに何か捨置詞をしながら金看板をばづして行く。門弟達が見るに見かねて途中に待伏せると之れがまた幾十人懸つてもかたはない。實に讀んで面白くつて肩が張らない。處が僕の武者修業と來ては初めから驚嘆の連發と失敗だらけ、おまけに武者修業をして却つて弱くなつたのだから助からない。平生僕に球を失敬された連中が此んなことを聞いたらザマ見ろ、老鷹の森に生意氣の事をして、京城『ゴルフ』の面汚しと憤慨と快哉を叫ぶだらうと思ふと、どうしても筆執る勇氣が出ない。が雜筆社の先生が毎日せめつけるので不安の裡にも、タマには僕の元氣に同情してくれる者がないと限らぬと自ら慰めて書く事にした。但し『ゴルフ』の心得なき方には何等の興味ないかも知れぬことを斷つておく。

一、武藏野へ

僕が武者修業に巡つたのは東京では、武藏野『カントリ、クラブ』駒澤、程ヶ谷。阪神間では甲南俱

楽部、六甲俱樂部と云ふ順序だつた。而して最後に大邸『クラブ』に寄つて來た。

十月十七日鮮銀の武安、不破の兩氏に連れられて武藏野クラブに行つた。入王子一ツ手前の豊田驛の西の方二十町餘りの山の中である東京から汽車で二時間以上驛から歩いて約三十分かかる。勿論自動車もなければ人力車もない。況して『チゲタン』など便利のものがないので『バッグ』を擔いで歩くと随分草臥れた。此所は『ゴルフ』を民衆的に普及せしむる目的で東京朝日新聞社が初めたので、入會などは容易である。『クラブ、ハウス』と云つても百姓家の一部を借り何の設備もない。『コース』の中に大木あり木の根も散在し芝など未だ植付けてない、おまけに諸處に石がゴロゴロして居るのでトテモお話にならない有様だ。會員は駒澤や程ヶ谷の『ブル』仲間入りの出來ぬ、否な寧ろ欲せぬ銀行會社や中堅階級で、中には部屋住の若旦那も居る。兎に角キビくした働き盛りの先生で萬事儀式視らずに元氣で何となく愉快であつた。設立日まで浅いので會員は多種多様、云はゞ玉石混淆である。洋行戻りの選りも居るわりに素人も大分居る。夫れに孝昌園で僕等と同

じだつた武安氏が委員で巾をきかせて居るので、輕蔑と云ふ譯ではないが、京師選手の腕前を見せて遣らうと云ふ考も少しは萌した。だが何んと云つても内地での初舞臺なので、體が馬鹿に堅くなる様な氣持もした。武安不破兩氏と競技する事になつて、第一の『デー』に立つて、ドライバーを振つたが割合に眞直ぐに百四五十ヤードある大溪谷を見事に飛び越した。處が球が丁度數十丈の斷涯の眞際に止つたので、第二撃は却つて球が逆戻りして溪の中に轉がり落ちた僅か三百幾十ヤードのコースを九撃もかかつて漸つと『グリーンオン』した。夫れに『サンド、グリーン』と云つてもまるでボク／＼する埃なので『パツテング』などトテモ出來ない。

第二コースは百ヤードで『デー』も『グリーン』も丁度大洋中の小島の様に山のテツペンにあつて、一撃で『グリーン、オン』せぬと幾つかゝるか判らないと云ふ難關だ。

◆ 籠

平野 天 桂

山かごに柿栗梨ととりおきてくれゆく秋の名残とどめむ

其他どのコースも山又山、阪又阪で其の上り下りの險はしいつたら實に豫想外だ。僕の様に孝昌園で八回巡つた『レコード、ホルター』でも一回で尻古垂れた。若し三井の住井大選手だつたら一巡はりせぬ内に絶息するだらうと思はるゝこと程左様に總てが峻険だつた尤もコースが山の上を縫ふて居るので武藏野の平野と富士の秀峯を一時の裡におさめて景色のよい事氣持のよい事他に見られない長所

だと思つた。結局僕は半歳休んで

方ゴールが羅馬や征服した意氣を

ンのよいので氣持が馬鹿によかつ

だと思つた。結局僕は半歳休んで居た不破氏にヤット同點で武安氏には大變負けた。

尙此所で驚いたのは東京附近でありながらキヤデー（球拾ひ）の言葉の悪い事、どれもこれも間拔面をして居る、おまけに折眼だか何んだか知らないが少し遠く飛ばすと球を見失ふ事受合、孝貞園鮮人『キヤデー』の足下にも追付かないコースは二百ヤード以下が多く三百ヤード以上は一ツであるが仲々打撃数はかゝる。

### 二、駒澤へ

十月廿日月曜の午、井上匡四郎子爵に案内されて駒澤に行つた。前日全岡ゴルフ選手争覇戦があつて丁度午前中に勝負が済んだと云つて大選手連が十聲中だつた。クラブハウスの完備してる事、コースのベルベットを敷き詰めた様な立派さに驚いて喫茶して居ると、井上子は僕を朝鮮の熱心なる『ゴルフ』だと云て何々侯爵とか、伯子男爵とか、何々富豪、何々選手と天下に名の知れた先生を紹介してくれた。ドチラを見ても服装の瀟洒なる、態度の鷹揚なる、自然に『ブル』の資格が備はつて居つた。僕は今迄何處に行つても人爵や富豪と云ふ金看板には驚かなかつたが、今日ばかりはドウしたものか馬鹿にチジコまつて自らがつまらない者の様な氣持がした。多くの選手を先きに出して井上子と僕とが『ティー』に立つた。夫れでもクラブハウスには相當多數の貴夫人令嬢と選手連がベランダで見物して居つた。井上子の後から僕が立つと、朝鮮の選手の鮮かな御手並拜見と彌次つた者があつた。僕は失敬な奴、今に見ろ、北

方ボールが羅馬や征服した意氣を見せてやると力んでドライバを振つた。球は見事に飛んだ、所がスライスして右のコースを越し入家に飛込んだ。ヤー、シマツたと二度目を振つた。今度も飛んだ事は飛んだが矢張右側の『ラフ』（草の深い所）に落ち込んだ。見物して居た紳士淑女は流石聲をたてて笑はなかつたが、僕は火を被ぶた様に顔に非常の熱さを感じた、同時に心臓の鼓動も激しくなつた

イクラ反對呼吸をして見ても靜まらなかつた。夫れでも第二眼目からは見物に遠ざかつたので落付きが出来てやりよかつた。『フェヤウエー』など餘り立派過ぎるのと今迄『グリーン、オン』するのに無暗に土手にブツ付ける癖が出て最初はグリーン附近のバンカー（人造障害壁）によく球を落した。當たつても當らなくてもコースやグリ

ンのよいので氣持が馬鹿によかつた。實の處僕は初めて『ゴルフ』の眞の快味を此所で味ふ事が出来たのだ。

駒澤は極平地で變化が少ない。夫れで各所にバンカーを髓へて興味を添へて居る。各コースの距離は相當長く、ドライバ、ブラッセイを使ふ所もあつておもしろい。此所でアウトバンドするとキヤデーは只アウト、バンドと云ふ許りで球を捜がそうとしない。夫れも其の等愚圖々々して居ると後から續々来る競技者の邪魔になるからである。

井上子にはドンナに暗張つて見てもかなはなかつた。然し此所で馴れたら、大して驚く事はないと自ら慰めた。井上子から時々色々の注意を軽く受けたが何處が悪いのか指摘されなかつたので徹頭徹尾飯泉流で遣り通した（次號完結）

### 近 什 四 首

京城鐵道局 黒澤明九郎

#### 撫順炭坑にて

地の底の炭ほり出す捲揚げの轟きゆゝし大地をゆりて

#### 同じく

妻ありや子ありや男兒千尺の堅坑の底に炭ほるをのこ

#### 乙 女

羅の緋の色褪せてから乙女かへらぬ人を徒らに待つ

#### 水 仙

花ながら花に戀なし水仙の清きに似たる尼法師かな

# 年 賀 狀

逓信局長 蒲原久四郎

年賀狀と題して、年賀郵便に關する仕事の上のことを申述やべうとするのではない。茲には逓信當局たる地位を離れた一箇人たる蒲原として、年賀狀管見とでも申しませうか、兎に角年賀狀に關する考の一端を筆にして、新年號に寄稿を依頼された責を塞がうと思ふ。

昨年、年賀郵便規則が改正せられた際に、小生の友人で、當時逓信省の郵便課長であつた高妻君が斯ふ言つた。

『一體日本人の年賀狀の出し方は冷靜に考へても考へなくても亂暴千萬である。受取つた賀狀は碌に見もしないで來年まで持越し、翌年は人を頼んで一々返事を出さずる様な向が少くない事は既に年賀狀の意義が没却されて居る證據であつて無佻浮薄寧ろ滑稽千萬な話である、卒直に言はしむれば虚禮の流行だ』。

其言辭は多少激越であるが其心持には多大の同感を禁じ得ないものがある。

廣告や宣傳の意義を以てせられる年賀狀は別として少くとも我々の年賀狀だけでも、顔を知らぬ人や、名前もよく記憶して居らぬ人の間に取替はされたりしない様に、そして責めては自分の手で書かれた眞に情味のあるものにしたと思ふ、小生も職掌柄年末首には極めて多忙なるところから、年賀狀はつい印刷したものを人に頼んで書くといふ癖に慣らされ來つたのであるが、嘗て一たび所謂年賀狀原簿なるものを讀んで見て、驚かされたのは、中に顔を思ひ出せない人が少くなかつたことである、之はいけないといふのでソレからは年賀狀なるものを極めて制限して親族と親しき間柄の人及特に世話になつた人位に止める事にした、現に昨年は封書で自筆で誦賀新年と共に其向き相當の事を書いた、中には六錢貼つたものもあつたが總計で三十一本、但し元日になつてから書くことは、事實不可能であることを考へたので、年内に書いたことは已むを得ないものと自覺する。

有漏雜染

酒 五 題

東拓 尾崎 敬義

東拓 志村 春方

元日や春の雨ふる木屋町は静かなれ  
どもうら淋しけれ

ふと胸に浮ぶことあり盃をそと膳に  
置きうつゝ見入れる

振袖やうす色にして元日の末の娘は  
色白の顔

天眞の發露を酔ひの内に見る今宵の  
君に眞實を見る

元朝や人愚ならざれば我愚なり都大  
路に春の風吹く

春の夜の酔ひまたあさき手枕に牡丹  
くつゝ絹づれの音  
酔ひをかひて若き女にたわむれしあ  
との心のさびしかりけり

人の世に男と生れ新春をまづことば  
かん白梅の花

獻詠三首

明治町 田中秀一郎

原宿に春は遅れて赤坂は淡く春めく  
夢の如き町

師の君にまゐらするべき花を買ふ江  
戸川堤春めくあした

更に大いなる望の我れにありといふ  
新春の日は物をこそ思へ

みまもればそと下を向く妹の春はつ  
かしきうす化粧かな

母は六十三、生は四十二、妻は三  
十四の春を迎へます、そして一家  
三人又拙いながらも十何年来続け  
來つた勅願の獻詠をしたのでした  
母の健在なのが私共にとり無上の  
幸福を感じしめます  
大空に連りわたる山なみのみどりは  
千代の色とこそ見れ(母)  
から國の山はいつしか緑りしてわが  
大御代の空に響ゆる(生)  
茂りあふ松よりほかの色もなし秩父  
高根のあかづきの空(妻)

感 激

渡邊病院長  
醫學博士 渡 邊 晋

十一月の末、齋藤總督閣下から招待状が来た、×月×日花月に參れとのことである、取り敢えず拜趨の旨は御返事を致したが、偕て何の爲めの御招待か、色々考へて見たがとんと譯が解らぬ、在官時代なら兎に角、今は野に下つて最新參の町醫者となつた今日、どうしても心當りが無い、町の同僚、在官時代の同僚にも二三問合せて見たが、御案内はないと云ふ、殊に又總督が花月に來られると云ふこともあまり聞かぬことであるから、何づれ誰か御主人代理でも來られることと思つて居た、兎に角光榮と多少の不安を感じつゝ、感當日が來たのである。

來ることあらば諸君と會して此の歡迎に報ゆると申述べて置きました、爾來物換り星移り、京城に來任することとなつたので、前言を果すことが出來ると喜んだ、然し残念な事には當夜の出席人名が見付らぬ、轉任等一身上の移動の劇しかつた爲めに名簿が荷物の何れに埋藏せられたか發見することが出來なくて來任以來常に遺憾に堪えなかつた、今回其の名簿を見出して本夕漸く宿志を果すことが出來た。

第である、萬事が現金主義、今日主義となつて、約束の手形は濫發しても不渡りにして平氣で濟ます浮薄の世の中では、誠に多大の活教訓を與へるものと云ふべく、吾人は此の體験によつて鮮やかな刺戟を受けて大に感憤しなければならぬと思ふ、當夜の來客總代の答禮辭中にも此の意味が述べられたか眞に一同の感情を代表したものと云ふべきである。

又一つ感すべきことは主人の用意の周到な事である、視察旅行の途中の一宴にすら其出席者の爲めに一帖を用意して之れに自署を求めて置かれた事である。

兎に角に一同の感激の裡に清い盛宴の夜が更けた、寄せ書きも賑つた、小生は夫れに感激の二字を書いて置いた。

◆田中氏の話

平 田 久 雄

木村屋主人の田中さん、何時も『世間ではパン屋の親爺が短歌なんか作つて生意氣なと笑つてるでせうね』と謙遜される、だがその歌を讀んで見るとどうしても素人でない、其處でよく聞て見ると十六七才時分から文藝に興味を持ち廿二、三の頃迄與謝野晶子、西村醉夢、薄田泣菫、金子薫園など現時文壇の元老株と提携して當時の雜誌文庫及新聲誌上に大いに活躍したとの事、又二十五才の時大連に於て七星會を起して滿洲に於ても隨分文藝趣味を鼓吹したもので勿論文藝で身を立てる決心であつたのが一旦實業界に這入るやうになつて全然其趣味を捨てたのださうな、これで漸く素人でない、所以が判明した、益々御寄稿をお願いしたい

云つて齒科衛生に何等の智識も有



るから、乍木本意他日再び京城に

流石であつて寔に敬服に堪えぬ次

した、益々御寄稿をお願いしたい

# 齒の衛生

愛生病院 齒科醫師 菊地壽直男

多事多難であつた大正十三年も過ぎて目出度十四年を迎へる事になつた、すべての人にとつて年の始めの悦びは又格別の事と思はれます、過ぎ去つた年を偲べば各々悲喜を異にして其感慨も亦無量であらうと察せられます、と同時にこの新しい年を迎へた、お互の胸の中には將來に對する希望の躍如たるものがあろうと思ひます。

私も一昨年渡鮮以來茲に第二回目の新春を無事に迎へる事の悦びを禁する事が出来ませぬ、其處で新春早々京城雜筆の餘白を借りて私の天職に對する希望を聊か述べさせて頂きたいと思ひます。

◇齒牙の衛生と云ふ事は今更私の喋々を要する迄もなく動物の生命保全上最も大切なものであります『齡』と字に書く如く齒の如何に依つて其齡歳を知悉する事が出来ます、馬は其齒牙を見れば年齢及び體質の健全健を知る事が出来る云ひます。

◇萬物の靈長たる人間は勿論、健剛なる齒牙の所有者は皆體質が非常に健全であります、或る人の調査に依ると高齢者はすべて健全なる齒牙の所有者であるとの事です全く健全なる身體を以て健全なる心神の働をするには是非共齒牙の健剛を先づ第一に考慮せねばならないと思ひます、世間には斯くの

如く保健上最も重大なる齒牙の衛生に對して殆ど無頓著なる人々の多いのは甚だ慨嘆に堪へない次第であります。

◇近來齒牙口腔衛生と云ふ事に付いては我が日本及歐洲諸國も異狀なる進歩發達を來たしたのも自然の勢であらうと思ひます、私も渡鮮以來飯塚齒科醫院に勤め、其間口腔衛生に就いて研究を續けて居りましたが中には此の重大なる齒牙の治療を肯ぜない様な無理解な人も随分ある様です。

◇尤もこれは目下の財界不況の影響も幾分ありませうが決して多額の金錢を要する譯ではない、只要は齒として與へられてる機能さへ完全に出来れば好いのである、と

云つて齒科衛生に何等の智識も有せない入齒業者等に大切な齒牙を委せる事は絶対に禁物であります何となれば彼等の仕事は實に吾々の監視する能はざる事を平氣で行つて居るのである、隨つて將來に於て悪影響を來さしめ大切な齒牙を棄なしにされます私は往々智識階級の人で前記の如き入齒業者に大切な齒牙の衛生を委せて失敗した面白い實例を見て居りますが餘り長くなるので左に齒牙衛生に對する私の希望を二三擧げて筆を擱きませう。

- 一、齒牙の健全を以て自己健康保持の主眼とすること
- 二、齒牙に知覺を感じる時は既に時期の遅れたるものなれば少しでも異狀を感じたなら直ちに専門家の診療を受ける事
- 三、齒牙衛生に關する相當知識を涵養して尠くとも年二回位齒牙の健康診断を受けること
- 四、治療を始めた時は時間位は犠牲にして徹底的にやる事

## 京 城 雜 筆

### 山 色 連 天

寺 尾 公 天

#### 題 東 亞 圖

髯奴墨狀使人憂、東亞隆興誰作籌、乞見圖中樞要處、蛟龍躍水是神州。(學圃先生評、言得切實)

#### 冬 夜 爐 邊 小 飲

寒風浙瀝凍雲頽、却見霜華樹々開、迎友會厨村酒在、爐邊對酌解吟頤。(評、第二句其奇、與第四句妙有照應)

#### 山 色 連 天

身健青邱又迎年、向東恭拜鶴聲邊、彩霞徐散曙光麗、山色連天帶瑞煙。(評、句々綴貼祥氣滿十緒墨之間)

正月漫筆

永樂町人

【四六】

等が平生『星』と呼んで居るのはその實皆我太陽と同じ太陽なんだ。

して太陽には三つの種類（赤色星、白色星、黄色星）があり、それそれ幼、壯、老の別がある。

赤色星は幼年若くは老年である、黄色星は青年若くは初老者である、熟度一萬度爛として天を焼く壯者は、悉く白色星である。

我太陽はそのいづれだらうか、彼れは『黄色矮星』と呼ばれ、その『齡』は既に五十歳に近いのである。

又

すれば、元且の朝堂々として、又嬉々として東空に飛揚する彼れもその夕べは無然として簡體の老を歎くに違ひない。

又

『太陽を歎く』——それは小説家の空しい題名のみでない。彼れ自身悚然たる折が多からう。

人

人間の盛衰は今に至つて極まれるやうだ。

古生代の生物は、魚貝の外はなかつた、魚貝進化して爬行となり、爬行分化して鳥、獸となつた、獸の中から人間が派生したのは、僅々三十萬年以來らしい。

過去の地上にはいろいろの生物が盛衰を誇つた、けれど種族にも『老』があり、地球的事情にも變革があるので、生者は必ず滅し、盛者は必衰の理を追ふて居る、その無窮の昌運を誇るものは曾てない人類老衰説が既に出て居る。

老ひるものは、我々箇人の形態のみでない。

胃腑が衰へたのだ、イヤ簡體が衰耗したのだ——畢竟老境が自分に歩み寄つたのだ。佻しい氣持がする。

又

去年などは、随分齒醫者に通つた次から次へ悪くなる、治療する一方缺けて行く。

その佻しさつたらない、自分の生命の確明の、刻々に滅入つて行くやうで、無氣味なこと夥しい。

又

朝の化粧室に、ぬけ毛に驚く婦人は多い。丁度私の齒の場合と同一だ。

が、彼等は『驚く』——單に『驚く』といふ以上の感懐はないらしい。私は婦人の勇敢に驚いて居る。

太陽

鷄鳴三號、元朝の太陽が出る。東天にたなびく雲を、瑞雲、祥雲といふ。

旭暉の莊嚴なること、この日に如くものはない。けれど太陽には『齡』はないだらうか『老』はないだらうか、彼れは萬年の少年なのだらうか。

又

空間には一千億の太陽がある、僕

又正月が来る。紋服を著、袴をつけ、威儀を正して屠蘇の膳に直れば、神氣清爽、何だか生れ變つたやうな氣がする街頭相遇うて『おめでたう』をいふ、虚偽ではない、實感なのである。

又

だが、元日といふ日も纏て暮れる一日の洞禮を終つて、家に還れば軒燈が輝き、しめ繩はハタ／＼と寒風にそよぐ。

番茶一服、ほつと一息つけば、油然として起るものは、又一つ年をとつたといふ感じである。

元朝の夜は寂しい。

又

僕等は、少年の心で、その晨を迎へ、老年の心緒で、その夕べを送るのだ。

人生の一縮圖だ。

老

雜燴を盛んに食つたのは、十六七の時だ。

それでも二十四五までは、かなりいけたのだ。

近年はどうにもならない、三つも平らげると、スグ胃散の御厄介にならなければならぬ。

又

人間は最も弱い動物だ。  
その機關の進化が精巧なだけそれだけ脆弱なのだ。  
二百度の熱に耐へず、零下百八十度の寒に耐へず、その棲息を許容せらるゝ温度の範疇が極めて狭い。若し過去にあつた氷河時代が再現

喜 悲

したら——それは決して相人墜天説のやうな空蕩なものではない。  
ではこれで筆を擱かう。  
正月の喜悲的情懷を叙べやうとして、すつかり悲觀説に陥つた。  
イヤ縁起でもない。

卷末に一言

雜筆社同人

◇謹んで年頭の御祝詞申上げます。  
◇さて、わが京城雜筆もいよいよ創刊第二年を迎へましたが、雜誌經營にとつては、當初の第一年が最も苦しく最も挫折し易いのださうです、然るに本誌はその第一關を先づ易々と凌ぎ切つたといふは、一に先輩各位の御後援に依るもので、何とも御禮の申しやうがございませぬ。  
◇この新年號の如きも極めて不出来ですが、兎も角も新裝して皆様に見ゆるに至つたのは、諸先輩が歳末最繁忙の際特に雜筆のため時間を割き、稿を起されたに依るもので、これだけでも私共は感激知遇に報ひなければならぬことを痛感します。  
◇こゝで時にお詫ひして置きたいことは、年末社員が年賀廣告の御依頼にあがつたことです、中には豫ねて原稿を頂戴したり、會社銀行の廣告の御斡旋を願つたり、相當御迷惑をかけての上ですから、あつかましの御叱りもあらうかと存じます、心私に恐懼してゐます、けれどもどうか大目に御覽を願ひたい……わが雜筆は平生紀念號、特別號、増大號、第何週年——それらの口實で、餘りしつこく御面倒をかけたつたつもりです、將來とてもその通りです、どうか一年一回のことと思召し、御寛恕のほど特に御願して置きます  
◇二月號はこの十日に稿を締切ります、年頭諸種の行事の多い時、定めてあつまりの悪いことを信じます、併し試筆は日本の習慣で、どなたも元且早々、一度は容を正して淨机に向はるゝことと信じます、すればその稿はどうか小社へお届けのほど、特に御願甲上げます

人 生 雜 記

◆(也圓參金價定)りあとほ部十三本殘◆  
◆し多述記るす關に學科然自てしと主◆

社 筆 雜 城 京 所 賣 發

【 四 七 】

細工の御用は  
本町 徳力へ  
電本三九三九

金 日 銀 金  
地金/御用ハ  
京城明治町  
徳力本店出張所  
電本二五〇八ハ

京 城

大正十三年十二月卅日印刷  
大正十四年一月一日發行  
一部定價金四十五錢  
京城府和泉町一六四  
發行所 京城雜筆社  
電話光化門三〇六番

編輯人 松本 武正  
印刷人 前原 登久雄  
印刷所 京城日報社  
京城府和泉町一六四

ならなければならぬ。

空間には一千億の太陽がある、鏡

みでない。

京 城 雜 筆

謹 賀 新 年

京城雜筆寄稿家

百六十六名(イハ順)

伊藤憲郎	伊集院兼雄	伊藤 龍	石川久臣	伊藤大輔	今村 綱	池畑健三郎	伊藤卯三郎	市山盛雄	岩本善文	石森久彌	石本芳文	市村 毅	岩本武治	井上 收	石 橋 滿	飯泉幹太	板倉益太郎	萩谷壽夫	早田愛泉	橋本秀次郎	西本量一	新田耕市	西村正雄	西田常三郎	西村滿藏	西崎鶴太郎	堀内滿輔	細井魚袋	別府八百吉								
富田儀作	德野眞士	利根川清次郎	時實秋穂	大垣丈夫	大島勝太郎	大橋恒藏	小野久太郎	大村友之丞	大 澤 勝	小龍元司	尾崎敬義	岡田恭藏	岡村介石	渡 邊 晋	蒲原久四郎	河谷靜夫	川 上 健	川端三次郎	加 藤 賢	角田廣司	加藤松林	河内山樂三	川本竹松	加納一米	川合昌一	神 崎 愿	河 野 誠	梶原峯治	河西青苔								
横田龍三郎	吉田平次郎	吉村貫之	田山贊平	田村直一	谷多喜磨	高木背水	田中秀一郎	多田毅三	高橋章之助	副島道正	坪 内 孝	名村寅雄	中 村 巖	中 村 友 子	中 村 郁 一	中 島 司	内藤定一郎	中村健太郎	長野眞彦	武者練三	内田竹三郎	野崎直三	野田新吾	野口喜代子	工藤武城	桑野賢治	久保田積藏	工藤重雄	倉田敏助								
山縣佛三郎	鯉崎篤志郎	大和與次郎	山口太兵衛	山路右近進	丸山鶴吉	松井民次郎	松岡正男	藤井寛太郎	福田有造	深尾道恕	藤尾直勝	古田まき	古城梅溪	權藤四郎介	小水直二	天日常次郎	寺澤菅叡	寺尾猛三郎	寺田壽夫	足立丈次郎	秋月左都夫	芥川 正	秋山忠三郎	麻 生 昇	青柳南冥	安藤又三郎	安達清太郎	有賀光豊	麻生音波	青木戒三	有馬純吉	齋藤庄三郎	澤村亮一	佐藤剛藏	櫻井秀專	櫻井小一	佐藤作郎
澤村九平	坂上滿壽雄	菊池謙讓	菊池壽直男	木戸虎藏	橋川克彦	岸 巖	結城二郎	弓削孝太郎	光永紫潮	水谷九二吉	溝呂木光治	篠田治策	進 辰 馬	志村四方一	篠崎潮二	澁谷禮治	新 貝 肇	釋尾東邦	泥谷良次郎	平井三男	久松前平	廣江澤次郎	平井熊三郎	平野天桂	榎 本 隆	森 悟 一	森 火 山	守屋榮夫	守屋徳夫	森 六 治	關根重憲	瀬 戸 潔	鈴木文次郎	砂田辰一	鈴木兵作	末松熊彦	鈴木銀藏

# 謹賀新年

## 向上靴

紳士向  
學生向  
女學生向  
各種

向上靴は彼の有名な教化事業向上會館産業部の製品  
で御座います、事業の性質から『正しき製作』と  
『正しき材料』とに依つて作られ、之に『正しき價  
格』を付して賣られて居ります、何卒御試用の上御  
批判を給はり度存じます

京城南大門通り

向上靴  
一手販賣店  
丁子屋洋服店

電話本局  
長二四六  
二二九九  
三〇九〇番

休日なし 毎日夜九時迄營業——御用の節は店內クツ部御呼出被下度候

賀正 進辰馬

賀正 堀内滿輔

賀正 高橋章之助

賀正 榎本隆

賀正 濱吉太郎

賀正 藤井寛太郎

賀正 澤村九平

賀正 川端三次郎

賀正 鈴木文次郎

賀正 麻生音波

賀正 富田儀作

賀正 櫻井秀專

賀正 西崎鶴太郎

賀正 川添種一郎

賀正 富田徹三

賀正 寺尾猛三郎

賀正 小瀧元司

賀正 水谷九二吉

賀正 加藤松林

賀正 徳野眞士

賀正 岩間元次郎

賀正 山本元光

賀正 中島司

賀正 守谷徳夫

賀正 高久敏男

賀正 野田新吾

賀正 今井武人

賀正 中村誠

賀正 七田常市

賀正 渡邊彌幸



賀正 有賀光豊

賀正 和田一郎

賀正 井内勇

賀正 韓相龍

賀正 山口太兵衛

賀正 飯泉幹太

賀正 岸巖

賀正 古字田巖

賀正 關口聰

賀正 尾崎勝三郎

賀正 弓削幸太郎

賀正 小林藤右衛門

賀正 松原純一

賀正 瀬戸潔

賀正 坪内孝

賀正 梶原峰治

賀正 森六治

賀正 齋藤久太郎

賀正 植村俊二

賀正 中村郁一

賀正 青木戒三

賀正 岩間亮

賀正 名村寅雄

賀正 加藤賢

賀正 河谷靜夫

賀正 近藤安吉

賀正 齋藤豊一

賀正 田中三郎

賀正 志村四方一

賀正 岡村介石

賀正 澤村亮一

賀正 川上健

賀正 西村宗一

賀正 島原鐵三

賀正 古田廉三郎

賀正 櫻井小一

賀正 深尾道恕

賀正 森悟一

賀正 田口耕平

賀正 北岡香平

賀  
正

京城電氣株式會社

賀  
正

滿鐵京城鐵道局

謹賀新年

京城手形交換組合銀行

謹賀新年

三井物産株式會社  
京城支店

賀正

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺ぐべからざるものであります  
徳用大瓶小型振出瓶等數種的美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

發賣元 富田商會

京城府南大門通二丁目九七九八

長電話本局三三〇九番 振替京城四五六八番

賀正

冬物背廣服  
同オールバ  
レインコート

新地質續々着荷

仕立念入り價格は安い

經濟的理想の既製品頗る豊富  
▲御注文に應じ特製仕候

京城 鍾路 一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番 振替京城二八四三番

謹  
賀  
新  
年

榎  
本  
法  
律  
事  
務  
所

辯  
護  
士  
法  
學  
士

榎

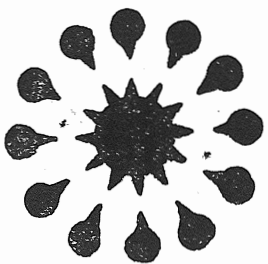
本

隆

京  
城  
明  
治  
町  
二  
ノ  
一  
〇  
五  
電  
話  
本  
局  
二  
八  
四  
四  
番



謹賀新年



早川堂看板店

電話本局二四七六番

謹賀新年

釘本樂器店

京城本町二丁目  
(電話本局一二八三番)

謹賀新年

濱洋服店

京城鍾路一丁目八八  
電話光化門二四四番

213

謹 賀 新 年

京 城 日 報 社

大 阪 每 日 新 聞  
京 城 支 局

謹 賀 新 年

朝鮮火災海上保險株式會社

株式會社 京城現物取引市場

朝鮮郵船株式會社

謹 賀 新 年

東洋拓殖株式會社  
京城支店

京城生命保險同業組合

日清生命保險株式會社  
朝鮮支社

謹 賀 新 年

和家齒科醫院

京城長谷川町二一

京城南大通二丁目

朝 明 舍

京城本町四丁目二四

內科小兒科  
婦人科齒科  
口腔外科

愛 生 堂 醫 院

電話本局三二七七番  
女醫平野須知  
齒科醫菊池壽直男

謹 賀 新 年

教育普成株式會社

社長 高橋章之助

京城永樂町二丁目  
電話本局一九四八番

京城木曜會

朝鮮勸業信託株式會社

京城信託株式會社

朝鮮土地經營株式會社

京城穀物信託株式會社

株式會社證券金融社

謹 賀 新 年

京城本町一丁目

株式會社 大澤商會京城支店

社長 大澤 德太郎

支店長 眞木 仙次郎

京城株式現物取引市場仲買人

新 田 耕 市

京城府黃金町二丁目

電話本局五七〇番同一九六番

自宅 櫻井町一丁目

電話本局二三九〇番



# 謹 賀 新 年

禁酒先

御慶でつまむ

お菓子をかな

明治町

木村屋

電話本局二八七〇番

標

時計其他

貴金屬の御注文は

電話本局三一六六番へ

時間の御問合せは

電話本局四七一番へ

準

京 城  
木村時計店

時

計

謹 賀 新 年

仁川米豆取引所

阿 鹿 西 多 宮 荒  
川 島 本 工 川 井  
組 組 所 組 組

賀正 山路右近進

賀正 谷多喜磨

賀正 松井民次郎

賀正 桑野健治

賀正 藤尾直勝

賀正 後藤一郎

賀正 鬼頭進

賀正 堆浩

賀正 平井熊三郎

賀正 結城次郎

製局専府督總明



兎や角迷はず

薬は萬病の靈薬人蔘劑中の王  
専賣局製造の蔘精に  
おきめ下さい御健康と幸福とが直ぐそこに  
大手を擴げてお待ちしております

鮮内一手販賣元

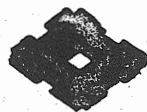
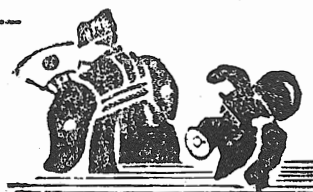
貴生堂薬品店

京城本町二丁目一  
電話本局一三八番  
振替京城七六八番

(價 定)

内用精蔘二十瓦入 (十五日分)  
壹圓五十錢  
浴用精蔘壹磅入 (十五回分)  
貳圓

蔘精の乘御申越次第無代送呈致します



株式會社

三中井吳服店



製局藥専府督總



兎や角迷はず

薬は萬病の靈薬人蔘劑中の王  
専賣局製造の蔘精に  
おきめ下さい御健康と幸福とが直ぐそこに  
大手を擴げてお待ちしてゐます

鮮内一手販賣元

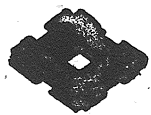
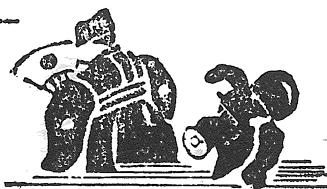
貴生堂藥品店

京城本町二丁目一二  
電話本局一三八番  
振替京城七六八番

(價 定)

内用精蔘二十瓦入(十五日分) 壹圓五十錢  
浴用精蔘壹磅入(十五日分) 貳圓

蔘精の葉御申越次第無代送早致します



株式會社

三井吳服店



謹賀新年

◎銘仙と

毛糸◎



京城本町

ちんぼや

堀内満輔

電話本局 八五五  
九〇〇  
〇六五  
番番番

◎多少に拘らず御用命

の程を願ひ上げます